

# 尚 綱 文 庫

しようけいごぶん

第 十三 号

令和六年

|  |            |
|--|------------|
| 肥後の国の軍記、覚書……………                                      | 武田昌憲…………1  |
| BERTopicを利用したTwitter(現X)における<br>くまモン・ファンダムの言論分析…………… | 畠山真一…………7  |
| 北曲雜劇「雲窓夢」第三折に関する考察……………                              | 福永美佳…………14 |
| マンガ研究からみるくまモンの「内面」の所在……………                           | 三浦知志…………19 |
| 日本文章学院『新文壇』記事一覧……………                                 | 山本歩…………34  |
| 夏目漱石『草枕』にみる<br>能楽世界の展開についての考察……………                   | 飯富章宏…………50 |
| 令和五年度卒業論文題目一覧……………                                   | ……………61    |
| (報告) イベント「尚綱大学で学ぶ<br>『キャラとストーリー』二〇二三」開催報告……………       | ……………63    |
| (報告) 「尚綱ビブリオバトル二〇二三」を開催しました……………                     | ……………64    |



# 肥後の国の軍記、覚書

武田昌憲

## はじめに

全国の城廻など、戦国時代が花盛りであるが、地方の戦国軍記にもそれなりに関心が高いようである。ということ、今回は地元、熊本県（肥後国）の軍記について、その作品群について視認しておきたい。戦国期を中心とする肥後の動向といえば豊臣秀吉の天下統一を阻んだいわゆる肥後国一揆で有名な国衆の存在が注目されよう。従って国衆レベルの小さな作品が登場してもおかしくない。

なお『戦国軍記辞典』（古典遺産の会編。群雄割拠編（平成2年2月発行）、天下統一編（平成15年12月発行）の二巻。和泉書院）。『肥後文献改題』（上妻博之著。2月発行。昭和63年5月新定版発行。舒文堂川島書店）を参考にした。

## 史伝・通史

肥後古記集覧

豊薩軍記 九州記

蒙古襲来

蒙古襲来絵詞

蒙古襲来防戦記

豊太閤征外新史

宅摩原軍記

梅北記

梅北物語

梅北記別記

梅北始末記

追考梅北記

梅北一揆次第新撰事蹟通考引用

坂井軍記 一名梅北記

佐敷一乱物語新撰事蹟通考引用

芦北軍記

隈庄合戦覚書

隈部落城覚書

響原合戦覚書

響原合戦記  
天正九年

響原合戦記

響野原古戦記

響野原戦記

響野原合戦記

深水三河守入道宗方覚書

響原合戦相良家覚書

堅志田合戦記

御船軍談

甲斐宗運軍記

竹迫落城記  
天正十三年

赤星崩記

隈部軍記

隈部物語

隈部実記

城村守戦記

山鹿郡城村籠城之次第

田中落城記

和仁軍談

和仁之城落城之覚

霜野物語

霜野来由記

霜野物語

花群山参詣天女夢物語

中原雜記

昔噺聞書

内空閑伝記

内空閑記内空閑盛衰記

井出旧記

太比良旧記

荒木鎮房聞書

三尾屋彦右衛門覚書

鶴崎合戦記

天草郡中小西行長与力合戦覚書

天草合戦記  
百姓共覚書

天草合戦覚書

天草由來記

神足掃部青龍寺にての覺書

丹城防戰全誌

丹後軍記

田辺御籠城記

宮村出雲覺書 慶長五年

北村甚太郎覺書

丹後御籠城覺書

細川幽齋丹後国田辺籠城記

中村甚左衛門田辺籠城御使者一件

難波戰記

立石軍記

宇土軍記 慶長五年

有馬記 忠利公御年譜中

有馬記 (十八冊)

有馬記

寛永治迹

寛永治迹

寛永平塞録

嶋原軍記日記

四郎記

金花傾嵐抄

唐津以來之聞書

並河太左衛門覺書 元文四年

一堤覺書 富岡籠城人

吉村台右衛門覺書 御家譜続編引用書

原城働覺書

山田衛門作申上覺 寛永十五年

山田右衛門作物語

志方半兵衛覺書 寛永十四年

嶋原天草之儀付而覺書

四郎記物語

島原合戰記

寛永島原及天草事變記

肥後記 国書解題

肥後志後篇 内空閑伝記引用

肥後志附録 内空閑伝記引用

肥後治乱記

肥後伝記 井沢氏の菊池伝記を取捨したるもの

征西大將軍宮譜

征西將軍宮譜附錄

征西大將軍八代宮御伝大略

征西將軍宮九州御下向考

菊池伝記

菊池伝記（十冊）

菊池佐々軍記

菊池伝記 肥後伝記ともあり

菊池寄合衆内談帳略注

菊池武朝申状

菊池武朝申状考証

葉室親善申状

菊池累代諸記録

菊地世譜

菊池野史

菊池野乘

菊池佐々記録 附安国寺縁起

観菊紀略

阿蘇大宮司惟澄申状

恵良惟澄申状

阿蘇家伝

阿蘇家伝略

北坂梨惟定申状

阿蘇外記 明治八年

沙彌洞然長状

相良家御家記

相良家御家記

相良家御家記

相良家御家記

独集覽

嗣誠独集覽

南藤蔦綿録

探源記（十四冊）

探源記

求麻外史

球麻風土記

清正記

清正記

続撰清正記

清正行状

加藤家伝

清正記

木村又蔵覚書

清正勲績考

清正実記

加藤家記事

加藤氏旧臣記

清正高麗陣覚書

高麗陣日記

清正松雲問答

魚住道庵覚書

竹内吉兵衛覚書

寛文十一年

細川御家伝

細川全記

細川御先祖略記

細川御伝記

細川家家号之由来書

家譜自家便覧

綿考輯録

藩譜採要

藩譜便覧

藩譜編年略

細川氏系譜便覧

御家伝録

細川家記

細川家御家譜

(以下細川家譜関係略)

細川幽斎公御行状

忠興公伝録

沢村大学覚書

越中記

御家記 秀吉公

忠興公御勲功之覚

牧亟太夫覚書 牧氏覚書

亟証雜記

細川忠興軍功記 国書解題

三斎様御軍功之覚

小須賀覚書

### 諸家

松井家家譜

松井家先祖由来附

松井帶刀殿家記（康之公也）

長岡家記

沼田家記

有吉家御家伝

有吉先祖以来覚書

葛西惣右衛門覚書

葛西家先祖附

米田家伝録

河喜多家記

藪家記

築山家由緒

加賀山家由緒略記

鰯之卷

宮原氏覚書

北里覚書

北里旧史系図

大友滋賀興廢記

加来氏家伝

竹迫家譜

光永家譜

永田家譜

阪梨甲斐家家譜

渡辺先祖以来今事記

渡辺大和守友寿覚書



# BERTopicを利用したTwitter（現X） における くまモン・ファンダムの言論分析

畠 山 真 一

## 1 はじめに

本研究では、畠山（2023）で提示したデータを再分析し、くまモンに関する「Twitter（現X）」への投稿をもとに、コアなファン層の特質について明らかにすることを目的とする。本研究で対象とするデータは、2021年9月29日～2022年1月5日の期間に収集されたものであるため、現在Xと呼ばれているSNSプラットフォームを旧来の「Twitter」と呼ぶ。

本研究では、投稿のトピックを深層学習を応用したBERTopicと呼ばれる手法を用いて分析し、その結果としてくまモン・ファンの成長過程とくまモンを実体化の間に関連性があることを明らかにする。

## 2 使用したデータについて

本分析のベースとなるデータは、「Twitter」社から提

供されているAPIを利用して、「くまモン」を本文に含む投稿を収集したものであり、その基本的な情報は次のとおりである。

- ・ 収集した期間…2021年9月29日～2022年1月5日

- ・ 本文に「くまモン」を含む投稿のすべてから、次の条件に当てはまるものを削除した。

- 「送料無料」という広告目的のキーワードを含む投稿を削除した<sup>(1)</sup>。

- 同一内容の複数投稿については、1つのみを残した。

- 投稿から絵文字、顔文字、URLを削除した。

- neologd<sup>(2)</sup> モジュールを利用して正規化した<sup>(3)</sup>。

投稿そのものに加えて、上述のデータには、次のような情報が含まれている。

・ ユーザ名、ユーザのプロフィール欄、投稿日時、返信 (reply) ならば誰宛か、RT 数など  
以後、上述のデータをくまモンデータと呼ぶ。

### 3 くまモンデータの基本情報

くまモンデータの基本的な情報は次のとおりである。

- ・ 投稿の総数は、66,214 である。
- ・ くまモンデータを構成するユーザの総数は、27,935 である。

当該期間 (2021 年 9 月 21 日 ~ 2022 年 1 月

5 日) の投稿数を横軸

に、その数の投稿を行ったユーザの人数を縦軸にとったヒストグラムを作ると図 1 のようになる (縦軸は対数)。

図 1 が示すように、当該期間に 1 ~ 2 個の投稿をするユーザが圧倒

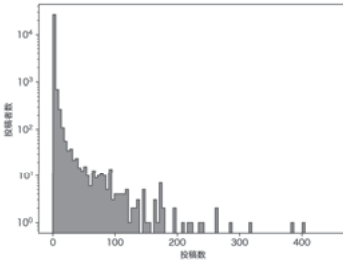


図 1 投稿数とユーザ数の連関

的に多いものの、この期間に 403 ポストしたユーザもあり、ある程度ロングテールの様相を見せている。

続いて、基本的な形態素解析結果について述べる。

本研究では、次のようなセッティングで投稿内容の形態素解析をおこなった。

- ・ 形態素解析器として、mecab を使用した。
- ・ システム辞書は、mecab-ipadic-NEologd を使用するとともに (佐藤・橋本・奥村 2017)、独自のくまモンデータに含まれる独自の表現 (たとえば、「おはくま」など) を含んだ個人辞書を使用した。

- ・ 形式名詞など、一般的な stop-word については除外した。

このようなセッティングのもとでくまモンデータに含まれる投稿内容に対して形態素解析を行った結果、投稿に出現する名詞、動詞、形容詞、間投詞の上位 10 語として表 1 が得られた。

表 1 単語の出現数

| 単語    | 出現数   |
|-------|-------|
| くまモン  | 66619 |
| さん    | 8363  |
| 今日    | 6928  |
| くま    | 5053  |
| 熊本    | 5052  |
| おほくま  | 4399  |
| モンちゃん | 3919  |
| 笑     | 2893  |
| ありがとう | 2875  |
| ちゃん   | 2758  |

## 4 BERTopicを用いた投稿からのトピック抽出

### 4.1 コア・ユーザーとライト・ユーザー

前節で述べたように、くまモンデータは、極めて活発にポストを行うユーザーと1、2度の言及に留まるユーザーが併存しているのが特徴である。ここで、全投稿数をおおまかに3分割し、投稿数とユーザー数の関係を見てみると、次の表2が得られた（カッコ内が当該ユーザーの投稿数である）。

このように、約2%にすぎない550ユーザーが、全投稿のおよそ40%弱をポストしている。これらの活発なユーザーを、これ以降、コア・ユーザーと呼ぶことにしよう。

反対に、圧倒的多数を占める（76%程

表 2 投稿数と投稿者数

|       | 投稿数 1 回  | 投稿数 2 回以上 12 回未満 | 投稿数 12 回以上 |
|-------|----------|------------------|------------|
| ユーザー数 | 21298    | 6087             | 550        |
| 投稿数   | 21298 投稿 | 18700 投稿         | 26216 投稿   |

度）当該期間に「くまモン」という語を含む投稿を1回のみ行った投稿者をライト・ユーザーと呼ぶことにしよう。

これ以降、コア・ユーザーとライト・ユーザーの投稿からBERTopicを用いてトピックを抽出し、比較分析を行う。

### 4.2 BERTopicとは

前節で述べたコア・ユーザーは、どのような投稿を行っているのだろうか。

次節ではこの点を、いわゆる深層学習にもとづく自然言語処理をリードしたと言える言語モデルの一種であるBERT (Bidirectional Encoder Representations from Transformers) をトピック分析に応用したBERTopicを利用した分析を提示するが (Devlin et al 2019; Grootendorse 2022)、本節では、分析ツールであるBERTopicの基本的なフレームワークを提示する。

BERTopicは、おおまかに言えば、次の3段階のステップを踏むことで文章のトピックを抽出する。

1. 文章を埋め込みベクトルに変換し (sentence-BERT が利用される)、類似度を計算できるようにする。

2. 得られたベクトルの次元削減を行った上で (UMAP を使用する)、クラスターリングを行い (類似した内容を持つ文章をグループ化する)、それによって得られたクラスターを一つのトピックとみなす。なお、クラスターリング手法に関しては、HDBSCAN<sup>7</sup>、k-Means などが選択可能である。

3. c-TF-IDF<sup>8</sup> もしくは BM25<sup>9</sup> に基づき、各クラスターの特徴語を抽出する。これが、各トピック (先の各クラスター) を代表する主要語である。

BERTopic は従来の LDA (Latent Dirichlet Allocation) に代表されるようなトピック分析 (Beaulieu et al. 2003) に比べ、語彙や文の意味を分散表現として利用しながら、意味の類似性に基づくクラスターリングを行っており、LDA に比べて高い精度でトピック抽出ができることが報告されている (川原, 2023)。

BERTopic は極めて多彩なパラメータを持つが、本研究では、次のようなセッティングでトピック抽出を行った。

1. sentence-BERT の日本語モデルとして、sentence-bert-base-japanese-v2<sup>10</sup> を利用した<sup>(3)</sup>。

2. 次元削減には、UMAP を、クラスターリングには、HDBSCAN を使用した (ハイパーパラメータについてはデフォルト値を利用した)。

3. 特徴語検出には、文章長の影響を受けにくいとされる BM25 を利用した。

#### 4. 3 コア投稿者言説からのトピック抽出

前節で述べたようなセッティングのもとで、コアユーザの投稿からなる文書集合に対して、BERTopic を用いてトピック抽出したところ、約半数 (13, 075 投稿) の投稿が分類不能となったものの、18 個のトピックが得られた。表 3 は、当該トピックに分類される投稿数の上位 5 グループを表にまとめた

ものである。なお、表3における「ラベル」名は、本稿の筆者がトピック主要語をもとに解釈した結果であり、BERTopicからは得られない要素である。

紙幅の制約のため、トピックへの貢献度についてTopic 0のみグラフ化すると、図2のようになる。

表3・図2から理解されるように、分類可能であった文書集合の半数が、くまモンを擬人化した「くまモンへの手紙」であることは特筆すべき現象と思われる。

同様にTopic 1は、くまモン体操をTopic 2はくまモンスクエアでの出演に関するクラスタであり、コア・ユーザが単なる図像では

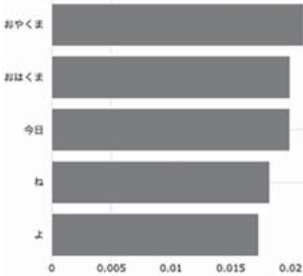


図2 トピックへの貢献度

表3 BERTopic によるトピック抽出 (コア・ユーザ)

| Topic | 分類された投稿数 | トピック主要語   | ラベル          |
|-------|----------|-----------|--------------|
| 0     | 12688    | おやくま・おはくま | くまモンへの個人的な手紙 |
| 1     | 76       | 体操・ダンス    | くまモン体操       |
| 2     | 70       | 11月・スクエア  | くまモン出演情報     |
| 3     | 59       | ぼっち・ジョージ  | クリスマス        |
| 4     | 29       | 合唱・絵描き歌   | くまモンの絵描き歌    |

なく、「元氣よく動き回り現実世界に身体を持つ」くまモンについて数多く言及していることが理解される。

#### 4. 4 ライト投稿者言説からのトピック抽出

前節と同様の手法でライト・ユーザの投稿からBERTopicを用いてトピック抽出したところ、分類不可能な投稿がコア・ユーザの場合と同じくおよそ半数あった。抽出されたトピックは、144個あり(意味なクラストが144個あったと言い換えられる)、コア・ユーザによる投稿集合と異なり、多様なトピックが出現していることが理解される。次の表4は、当該トピックに分類される投稿数の上位5グループを表にまとめたものである。

これらのトピック集合は、前節のコア・ユーザのものと大きく

表4 BERTopic によるトピック抽出 (ライト・ユーザ)

| Topic | 分類された投稿数 | トピック主要語   | ラベル               |
|-------|----------|-----------|-------------------|
| 0     | 3658     | かわいい・好き   | くまモンへの愛着          |
| 1     | 552      | 熊本城・熊本    | 熊本県の象徴            |
| 2     | 541      | グッズ・買った   | モノとしてのくまモン        |
| 3     | 454      | 美味しい・クレープ | パッケージアイコンとしてのくまモン |
| 4     | 153      | 歌・fns 歌謡祭 | TVの中のくまモン         |

異なっている。それは、身体性の顕現性に関する差である。ライト・ユーザのくまモンへの愛着を示す「Topic 0」に含まれる投稿を見ると、身体性が感じられないものも多い（感じられるものももちろんあり、コア・ユーザと同様に「くまモンへの手紙」と解釈できるものも数多くある）。

- マスクしてサムズアップして行くくまモン良すぎる

- ひこニャン、くまモンは双璧

- くまモン笑笑たしかに強そう

また、「Topic 1」から「Topic 3」までは、身体を持たないアイコンとしてのくまモンがトピックとなっている投稿と解釈できる。ただし、「Topic 4」については、TVで見るという制約はあるものの、身体を持ち動き回るくまモンをトピックとする投稿集合と解釈できる。

このように、「Topic 4」という例外はあるものの、ライト・ユーザによる投稿に出現するくまモンは身体性があまり感じられず、一種の「アイコン」ととどまっていると解釈するのが妥当であろう。

## 5 コア・ユーザとライト・ユーザの投稿集合の差異について

先述のように、コアユーザは「くまモンへの手紙」という性質を持つ投稿が圧倒的に多く、身体を持ち現実世界に定位するくまモンへの愛着を表現するという傾向を持っている。コア・ユーザも最初の段階ではライト・ユーザであったであろうということを考え合わせると、アイコンとしてのくまモンを愛好するライトなファンから成長した結果、コア・ユーザは、くまモンに身体性を見出すようになったと分析するのが妥当であろう。

ここで問題となるのが、ファンの「成長」を支える環境をどのように構築するかという点である。これに関しては、佐藤（2018）の議論されているファンダムへのアプローチが有効であると考えている。

## 6 おわりに

本レポートでは、「Twitter」における「くまモン」を含む投稿をBERTopicによって分析することを通じて、くまモン・ファンの成長過程を明らかにした。

注

- (1) 畠山 (2023) のツイート削除が充分でないため、本稿では徹底した。
- (2) neologdnt <https://pypi.org/project/neologdnt/> からダウンロード。
- (3) <https://huggingface.co/sonoisai/sentence-bert-base-japanese-mean-tokens-v2>

参考文献

- Biel, D.M., Ng, A.Y., and Jordan, M.I.(2003). "Latent Dirichlet allocation." Journal of Machine Learning Research, 3, pp. 993-1022.
- Devlin, J., Chang, M.-W., Lee, K., and Toutanova, K. (2019). "BERT: Pre-training of Deep Bidirectional Transformers for Language Understanding." In Proceedings of the 2019 Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies, Volume 1 (Long and Short Papers), pp. 4171 – 4186, Minneapolis, Minnesota. Association for

Computational 6 Linguistics.

- Grootendorst, M. (2022). "BERTopic: Neural topic modeling with a class-based TF-IDF procedure." arXiv preprint arXiv:2203.05794.
- 畠山真1 (2023) 「Twitterにおけるくちモンの評判分析ーファンコミュニティの視点からー」尚絅語文第12号, 7-16
- 堀田治 (2015) 「超高関与消費のマーケティングパター」『AD STUDIES』, 51, 15-20
- 川原一修 (2023) 「トピックモデルによる市場変動要因の抽出」言語処理学会第29年次大会 (NLP 2023), pp.2190-2194, 言語処理学会
- 佐藤一誠 (2015) 『トピックモデルによる統計的潜在意味解析』コロナ社
- 佐藤尚之 (2018) 『ファン・ベース』ちくま新書
- 佐藤敏紀・橋本泰一・奥村学 (2017) 「単語分ち書き辞書mecab-ipadic-NEologdの実装と情報検索における効果的な使用法の検討」言語処理学会第23回年次大会 (NLP 2017), pp.875-878, 言語処理学会

# 北曲雜劇「雲窓夢」第三折に関する考察

福永美佳

## 一 はじめに

明代無名氏作の北曲雜劇「鄭月蓮秋夜雲窓夢」(以下「雲窓夢」と称す)は、妓女鄭月蓮が書生張均卿と結ばれる話である。

現在確認される「雲窓夢」テキストは、次の七種である<sup>1)</sup>。

- (一) 脈望館鈔校于小穀本「鄭月蓮秋夜雲窓夢」
- (二) 『詞林摘艷』「秋夜雲窓夢雜劇」第一折、「雲窓夢雜劇」第三折

- (三) 『詞譜』「鄭月蓮秋夜雲窓夢」第一出

- (四) 『楊夫人樂府』「仙呂點絳脣」一套

- (五) 『盛世詞林』仙呂目録「驕馬吟鞭」一套、中呂目録「皓月澄澄」一套

- (六) 『北詞譜』「雲窓夢」仙呂宮【村里迓鼓】【後庭花】の二曲【尾声】から一句。中呂宮【十二月】。

(七) 『北詞廣正譜』「雲窓夢」仙呂宮【村里迓鼓】【後庭花】の二曲、【尾声】から一句。中呂宮【十二月】。

このなかで(一)は明の宮廷における上演用テキストの写しとして知られるもので、セリフやしぐさを完備する唯一の戯曲テキストである。これ以外は、劇としてみればストーリーの一部しか伝わらないテキストである。しかも、ここに挙げた七種すべてがそろうのは第一折に限り、それ以外は第三折が(一)(二)(五)(六)(七)に伝わるだけである<sup>2)</sup>。

筆者は右に挙げた七種のテキスト間の異同にもとづき、明代の嘉靖年間にテキストの校合によって祖本を再建する運動が起きていることを明らかにしている<sup>3)</sup>。本稿は、このなかで紙幅の都合により取り上げることができなかった第三折を対象に、五種のテキスト間の異同を考察し、「雲窓夢」第三折には宮廷



本系統のテキストと、民間本系統のテキストの二系統が存在することを明らかにする。

## 二 曲牌の違い

先述したように第三折が伝わるテキストは、脈望館鈔校于小穀本「鄭月蓮秋夜雲窓夢」（以下、「于」雲窓夢」と称す）、『詞林摘艷』「雲窓夢雜劇」（以下、「林」雲窓夢」と称す）、『盛世詞林』中呂目錄「皓月澄澄」以下、「（盛）皓月澄澄」と称す）、『北詞譜』「雲窓夢」中呂調【十二月】（以下、「（北）雲窓夢」と称す）、『北詞廣正譜』「雲窓夢」中呂調【十二月】（以下、「（廣）雲窓夢」と称す）の五種である。

諸本の異同として挙げられるのは、曲牌名および数である。テキストごとに曲牌名を示したものが、次の表である。なおテキストを引用する際は、字体を区別し、可能な限り原文どおりに記す。

|    |         |        |         |        |        |
|----|---------|--------|---------|--------|--------|
|    | （于）雲窓夢  | （林）雲窓夢 | （盛）皓月澄澄 | （北）雲窓夢 | （廣）雲窓夢 |
| 1  | 〔中呂粉蝶兒〕 | 〔粉蝶兒〕  | 〔粉蝶兒〕   |        |        |
| 2  | 〔醉春風〕   | 〔醉春風〕  | 〔醉春風〕   |        |        |
| 3  | 〔迎仙客〕   | 〔迎仙客〕  | 〔迎仙客〕   |        |        |
| 4  | 〔紅綉鞋〕   | 〔朱履曲〕  | 〔紅繡鞋〕   |        |        |
| 5  | 〔石榴花〕   | 〔石榴花〕  | 〔石榴花〕   |        |        |
| 6  | 〔鬪鶯鶯〕   | 〔鬪鶯鶯〕  | 〔鬪鶯鶯〕   |        |        |
| 7  | 〔普天樂〕   | 〔普天樂〕  | 〔普天樂〕   |        |        |
| 8  | 〔上小樓〕   | 〔上小樓〕  | 〔上小樓〕   |        |        |
| 9  | 〔么〕     | 〔么〕    | 〔么篇〕    |        |        |
| 10 | 〔快活三〕   | 〔快活三〕  | 〔快活三〕   |        |        |
| 11 | 〔鮑老兒〕   | 〔鮑老兒〕  | 〔鮑老兒〕   |        |        |
| 12 | 〔十二月〕   | 〔十二月〕  | 〔十二月〕   | 〔十二月〕  | 〔十二月〕  |
| 13 | 〔喪民歌〕   | 〔喪民歌〕  | 〔喪民歌〕   |        |        |
| 14 | 〔偈遍〕    | 〔偈遍〕   | 〔偈遍〕    |        |        |
| 15 | 〔耍孩兒〕   | 〔耍孩兒〕  | 〔耍孩兒〕   |        |        |
| 16 | 〔四煞〕    | 〔三煞〕   | 〔耍孩兒〕   |        |        |
| 17 | 〔三煞〕    | 〔二煞〕   | 〔耍孩兒〕   |        |        |
| 18 | 〔二煞〕    | 〔二煞〕   | 〔耍孩兒〕   |        |        |
| 19 | 〔尾煞〕    | 〔尾聲〕   | 〔尾聲〕    |        |        |

この表で示すように、曲牌数はテキスト間で大きく異なる。「（于）雲窓夢」「（林）雲窓夢」「（盛）皓月澄澄」には、十九曲が伝わる。ところが「（北）雲窓夢」「（廣）雲窓夢」に伝わるのは【十二月】だけである。

このようにテキスト間で曲牌数に差があるのはテキストの性質に起因するものであろう。戯曲の選集である于小穀本、曲選である『詞林摘艶』『盛世詞林』では歌辞の内容を伝えることが重視され、ある程度まとまった形で残されていると考えられる。これに對し、曲譜である『北詞譜』『北詞廣正譜』では、曲律を載せることが優先された結果、必要な部分のみ切り取られたのである。

また、曲牌名においても違いがある。一つは四曲目において、「(于) 雲窓夢」及び「(盛) 皓月澄澄」では【紅綉(繡) 鞋】とあるが、「(林) 雲窓夢」では【朱履曲】とある。先行研究によれば【紅繡鞋】と【朱履曲】とは同じものとされ、内容上の異同はない。この他、十六曲目から十九曲目にある四曲は、「(于) 雲窓夢」では【四煞】【三煞】【二煞】【尾煞】の順だが、「(林) 雲窓夢」では【三煞】【二煞】【一煞】【尾聲】の順であり、「(盛) 皓月澄澄」では【耍孩兒】【耍孩兒】【耍孩兒】【尾聲】の順である。これらは曲牌名こそ違うが、内容はそれぞれ対応している。

それでは、歌辞にどのような相違があるだろうか。

### 三 歌辞の異同

まず【石榴花】を挙げる。(例①)

(于) 聴的唱陽関歌曲腦門疼、委實的倦聴、慘然悽聲。  
(林) 聴的唱別離歌曲腦門疼、委實的倦聴、慘然悽聲。  
(盛) 聴的唱別離歌曲腦門疼、委實的倦聴、慘然悽聲。  
(北) なし  
(廣) なし

ここは「(北) 雲窓夢」「(廣) 雲窓夢」には伝わらない。傍線部において「(于) 雲窓夢」では「陽関歌曲」であるが、「(林) 雲窓夢」及び「(盛) 皓月澄澄」では「別離歌曲」である。陽関曲とは、唐代王維の七言絶句「送元二使安西(元二の安西に使いを送る)」にもとづく曲で、別れの歌として名高い。ゆえに「陽関」と「別離」が意図するものは同じということになる。ところが、「(于) 雲窓夢」では典故を用いて暗示するのに對し、「(林) 雲窓夢」「(盛) 皓月澄澄」では直接的な表現を用いている。これは明らかな差であり、宮廷本系列の「(于) 雲窓夢」と、「(林) 雲窓夢」及び「(盛) 皓月澄澄」とは系統が分かれることを示している。

それでは「(林) 雲窓夢」と「(盛) 皓月澄澄」には異同が存在しないのか。次に【三煞】「(林) 雲窓夢」では【二煞】「(盛) 皓月澄澄」では【耍孩兒】を挙げる。(例②)

(于) 惱人心半窓<sub>レ</sub>裊<sub>レ</sub>裊疎梅影、聒人耳萬種<sub>レ</sub>蕭<sub>レ</sub>蕭落葉聲。

(林) 惱人心半窓<sub>レ</sub>裊<sub>レ</sub>裊疎梅影、聒人耳萬種<sub>レ</sub>消<sub>レ</sub>消落葉聲。

(盛) 惱人心半窓<sub>レ</sub>裊<sub>レ</sub>疎梅影、聒人耳萬種<sub>レ</sub>蕭<sub>レ</sub>蕭落葉聲。

(北) なし

(廣) なし

ここも「(北) 雲窓夢」「(廣) 雲窓夢」に伝わらない。傍線部では、「(于) 雲窓夢」が「裊」であり、「(林) 雲窓夢」「(盛) 皓月澄澄」が「裊」である。「裊」は「窓」の異体字であるため意味の違いはなく、ここでは梅の木の影が「ゆらゆら」する様子を形容している。また、波線部では「(于) 雲窓夢」が「蕭蕭」とし、「(林) 雲窓夢」が「消消」とし、「(盛) 皓月澄澄」が「蕭蕭」とする。これらは、字が違うが音は同じ

で落ち葉の落ちる「ざわざわ」という音を表すものである。つまり、例②の異同は表記法の差であって内容上の差ではない。よって、例①及び例②にもとづけば「(林) 雲窓夢」と「(盛) 皓月澄澄」とが同じ系統であると考えられるのである。

そのほか「(北) 雲窓夢」「(廣) 雲窓夢」ではどうだろうか。五種類のテキストが伝わる【十二月】を挙げる。(例③)

(于) 可<sub>レ</sub>搂 抱在懷兒里、 覷<sub>レ</sub>着這短命牢成。

(林) 可<sub>レ</sub>搂着 懷兒裏抱定。 覷<sub>レ</sub>着這短命牢成。

(盛) 可<sub>レ</sub>搂着 懷兒裏抱定。 覷<sub>レ</sub>着這短命牢成。

(北) 可<sub>レ</sub>搂着 懷兒裏抱定。 覷<sub>レ</sub>着這短命牢成。

(廣) 可<sub>レ</sub>搂着 懷兒裏抱定。 覷<sub>レ</sub>着這短命牢成。

ここでは「(于) 雲窓夢」を除くすべてのテキストの本文が一致している。このように「(北) 雲窓夢」「(廣) 雲窓夢」が、「(林) 雲窓夢」「(盛) 皓月澄澄」と本文が一致していることから、この四つのテキストが同系統であると考えられる。また、例①をふまえると、宮廷本に由来する「(于) 雲窓夢」と、民間由来のテキストとは明らかに系統が異なるといえる。

## 四 おわりに

北曲雜劇「雲窓夢」第三折を有すテキストは五種ある。その五種とは、「(于)雲窓夢」「(林)雲窓夢」「(盛)皓月澄澄」「(北)雲窓夢」「(廣)雲窓夢」である。

これらのテキストは、二系統に分けられる。一つが、宮廷本に由来する「(于)雲窓夢」の系統である。もう一つが、「(林)雲窓夢」「(盛)皓月澄澄」「(北)雲窓夢」「(廣)雲窓夢」の系統である。全体的にみて第三折は、第一折に比べて異同が少ないが、そのわずかな異同からも宮廷本と民間本とは系統が分かれることが見て取れる。これは第一折の考察の結果とも矛盾が生じない。

1 本稿で使したテキストは次のとおり。

- ① 『脉望館鈔校本古名雜劇』第八冊 張琦美輯（綫裝書局、二〇一六年）所収
- ② 『詞林摘艶』張祿輯 明嘉靖四年刻本影印『續修四庫全書』一七四〇冊（上海古籍出版社、一九九五年）所収
- ③ 『盛世詞林樂府大全』第四冊 明無名氏編 明鈔本 中国国家図書館「中華古籍資源庫・数字古籍資源庫」  
(<http://read.nlc.cn/OpenBook/OpenObjectBook?aid=892&id=120375.0>)
- ④ 『北詞譜』第一冊 徐慶卿編 中国国家図書館「中華古籍資源庫・数字古籍資源庫」  
([http://read.nlc.cn/OpenBook/OpenObjectBook?aid=892&](http://read.nlc.cn/OpenBook/OpenObjectBook?aid=892&id=120375.0)

id=157091.0)

- ⑤ 『一笠菴北詞廣正九宮譜』李元訂 清康熙間文靖書院刊本
- 2 「(于)雲窓夢」には幕の切れ目を示すものがない。便宜上、北曲雜劇において幕切れを示す「折」によって区切る。
- 3 福永美佳「李開先以後に見られる本文批評の実践と祖本再建」(近日中に公開予定)
- 4 「(林)雲窓夢」では、【上小楼】の歌辞のあとに続いて【么】を載せる。
- 5 鄭壽「北曲新譜」(芸文印書館、一九七三年)によると、【紅綉鞋】と【朱履曲】は同じものとされる。

※本研究はJSS科研費一九K一三〇九二の助成を受けたものです。

# マンガ研究からみるくまモンの「内面」の所在

## 三 浦 知 志

### はじめに

自治体や観光地のPRという役目を持つ着ぐるみのキャラクター、いわゆる「ご当地キャラクター」を楽しむ文化は、2020年代の日本にとつてすでに当たり前のものとなっている。ご当地キャラクターが注目を浴びる大きなきっかけを与えた「ゆるキャラグランプリ」は2020年に終了しているが、そのことによってご当地キャラクターの勢いが失われてしまったというのではなく、ご当地キャラクター関連イベントは引き続き各地で行われている。たとえば宮城県では、2023年7月19日から9月29日まで、宮城県内の市町村から25のご当地キャラクターが参加した「宮城ご当地キャラぐらんぷり」(主催・東日本放送)が開催された<sup>i</sup>。また群馬県では2023年9月30日・10月1日に、群馬県のご当地キャラクター「ぐんまちゃん」の生誕30周年を記念

した「ご当地キヤラカーニバル」(主催・群馬県、協力・(二社) 日本ご当地キャラクター協会)を開催し、全国92のご当地キャラクターが集結している<sup>ii</sup>。こうしたイベントが自治体や観光地のPRにどれほど効果をもたらしているのかは定かではないが、少なくとも、ご当地キャラクター自体が一般の人々にとって娯楽の対象、あるいは愛の対象になっているということができるだろう<sup>iii</sup>。日本ご当地キャラクター協会の代表理事である荒川深冊氏は当協会ウェブサイトにおいて、着ぐるみのご当地キャラクターのことを「キぐるミキャラクター」と呼び、その意図を「当協会では、ご当地キャラクターが販促としてのただの着ぐるみとは一線を画す生きた存在であることに敬意と愛をこめて『キぐるミ』と表現しています」と説明する<sup>iv</sup>。ご当地キャラクターはいまや、自治体や観光地のPRの手段というだけでなく、その「生き

た存在」自体が存在理由なのだろうと推測させる。

本稿の目的は、ご当地キャラクターが「ただの着ぐるみ」ではなく「生きた存在」として人々に受容されるあり方を考察するひとつの試みとしての、熊本県のご当地キャラクター「くまモン」の分析である。2010年に誕生したくまモンは、2011年の「ゆるキャラグランプリ」で1位を獲得して以降、その知名度や各種メディアやイベントへの登場数などが他のご当地キャラクターに比べて突出しており、日本で最も有名なお当地キャラクターのひとつと言ってよい。そしてこの間さまざまな活動を通じて人々との交流を続け、多くの熱心なファンを生みだしてきた。本稿では、くまモンのこうした活動が人々どのように受容されているかを、くまモンが登場するメディアおよびイベントの具体例を記述することによって明らかにしたい。またその際、主にマンガ研究の領域で発展しているキャラクター論を参照し、くまモンというキャラクターの特質を浮かび上げさせることも企図している。

本稿の構成は以下の通りである。まず、くまモン

が登場するメディアの具体例、すなわちくまモンを主人公とするマンガ、およびくまモンを主題とするインターネット記事を紹介し、それぞれにおいてくまモンがどのようなキャラクターとして描かれているかを記述する。そこで主張されるのはくまモンの受容がくまモンの物語化と密接な関係にあるという点である。次に、マンガのキャラクター論を参照し、キャラクターの物語化に関する議論を説明しつつ、これをくまモンのケースに応用する。その後、くまモンが登場するイベントの説明を通して、マンガのキャラクター論においては原理的に扱うことが難しい、くまモンの動きや実在のあり方について若干の考察を行う。

### くまモンのマンガ

くまモンを主人公にしたマンガはいくつか刊行されている。熊本県民にとって馴染みがあるのは、地方紙『熊本日日新聞』朝刊で2013年に連載を開始した4コママンガ「くまモン」であり、これは『コミックくまモン』という題で単行本化されている（著

著作権者…熊本県、監修…小山薫堂、朝日新聞出版、既刊9巻)。また、小学館から刊行された『学習まんがくまモン』（まんが…森真理、ストーリー…三条和都、監修…熊本県くまモングループ、解説…蒲島郁夫熊本県知事、2018年）は、同シリーズ初となる「人間ではないキャラクターの偉人伝」ということで話題となった。本稿ではこの『学習まんがくまモン』を主に分析対象とする。

『学習まんがくまモン』には、「地域振興と災害復興にかけまわる次世代のリーダー」というサブタイトルがついており、マンガの章立てもおよそこのサブタイトルに沿ったものとなっている。まず第1章「くまモン、関西へ」では、2011年開業の九州新幹線（鹿児島ルート）にあわせ、熊本県の魅力を県内外、とりわけ関西に伝えるためにくまモンが誕生したこと、くまモンが地域振興キャラクターであることが説明されている。くまモンは蒲島知事から、ひとりで関西に向かって人々の注目を集め、そのことで関西の人々に熊本に興味を持ってもらおうという「くまモン話題化計画」を命じられる。はじめは

弱気だったくまモンだが、蒲島知事から「皿を割れ（失敗を恐れるな）」と激励され、「くまモン話題化計画」を成功させようと努力する。多くのストーリーマンガと同様、『学習まんがくまモン』においても、困難を克服する姿の描写が物語の推進力となっている。ちなみにくまモンは、蒲島知事や他の人間の登場人物と直接会話することはほとんどないが、相手の言うことを理解することはでき、感情表現も可能である。また、アテンンドの女性「山本タマコ」はくまモンの考えている内容が理解できており、彼女がくまモンのそばにいたときは、くまモンと他の人間とのコミュニケーションはまったく問題なく行われている。さらに、くまモンの内言（心の声）やくまモンによる読者向けのナレーションが多く用いられており、総じて、くまモンは人間の言葉や人間とのコミュニケーションに不自由がないキャラクターとして描かれている。

第2章「くまモン大活躍」で描かれるのは、2011年の東日本大震災に際して募金活動を行うくまモンの姿、そして「熊本県営業部長」として熊

本の食の魅力をPRするため、関西の食品関連企業を対象に外回り営業を行うくまモンの姿である。くまモンの実力に半信半疑の県職員「加藤先輩」が、くまモンをそばで応援する山本タマコと反目する場面が時折あり、加藤先輩の存在によって、読者は「くまモンの仕事はたしてうまくいくのかどうか」と緊張感をもってマンガを読み進めることになる。その後、「ゆるキャラグランプリ」1位獲得をきっかけにくまモンが全国的に有名となる（加藤先輩はくまモンの営業力を認めざるを得なくなる）。つづく第3章「しあわせ部長」では、くまモンの活動拠点「くまモンスクエア」（熊本市中央区）オープン、天皇皇后両陛下（現・上皇上皇后陛下）との対面、「熊本県しあわせ部長」就任など、2013～14年の出来事がまとめられている。第3章にはくまモンにとっての大きな困難はなく（ダイエツトに苦しむくまモンは描かれるものの）、この時期の日々の幸せを楽しむくまモンが示される。もともと第3章最後のコマには「そのころボクは、こんなに楽しい毎日が／これからもずっとずっと続くと思っていたんだモン。」

というくまモンのナレーションがあり、この後に待ちかまえる不幸を予感させるものとなっている。

その不幸がすなわち第4章「熊本地震」であり、2016年の熊本地震において県職員が対応に追われるなか、くまモンはひとり、県庁のテレビで被災地の映像を眺めながら無力感に打ちひしがれている。「ボクにはできることが無いもん。／悲しいモン。／つらいモン。／悔しいモン。」という内言に囲まれ、ページの真ん中で小さくうずくまるくまモンの姿は、『学習まんが くまモン』におけるくまモン最大の困難を表している。そして、この試練を克服するくまモンが描かれるのが第5章「立ち上がれ、くまモン」である。くまモンの無事を願うファンからの手紙がたくさん届き、また「くまモンの姿が見たい」というファンレターをいくつも読むうちに、くまモンは避難所への慰問を決意し蒲島知事に直談判する。判断に悩む知事に対し、くまモンは「皿を割りたい」と（山本タマコを通して）伝え、山本タマコも「水や食料などの支援も必要だが、被災者の心のケアも必要だ」として、くまモンに加勢する。さらには加



藤先輩までもがくまモンに賛同し、その熱意に説得される形で知事が慰問を許可する。ここで知事は「くまモンから皿を割らせてくれと言うとは。／＼本当に成長したな。」とくまモンに告げており、この「偉人伝」がくまモンの成長物語であることが明らかとなっている。本章の最後、予想以上に空気の重い避難所を前にくまモン出動を躊躇する山本タマコたちだったが、実際にくまモンが現れると子供も大人も喜び、くまモンが被災者の「心のケア」を担えるキャラクターであることが示されて物語は終わる。

以上、『学習まんが くまモン』のあらすじを追ってきたが、このマンガでくまモンは人間の言葉を操り、自ら考え行動するキャラクターとして描かれており、一方で、たとえば水野学によるくまモンのビジュアルデザイン制作の経緯や、くまモンの着ぐるみの大きさや材質の選定など、くまモンの物質的な出自や特徴についての話はほとんど出てこない。くまモンは最初から自律的なキャラクターであり、まさに「生きた存在」として描写されているのである（この点は『学習まんが くまモン』だけでなく『コミック

くまモン』のほうも同様である）。また『学習まんが くまモン』には、くまモンの楽しそうな日常がコミカルに表現されているだけでなく、くまモンの前に立ちはだかる困難、およびその困難を克服し成長するくまモンの姿も描かれ、ストーリーマンガの典型的な形式に従っている。

要するに、くまモンはマンガ化されるにあたり物語を伴っている。もちろんストーリーマンガという形式に従う以上、くまモンが物語化することはある程度必然ではあるのだが、逆に、そもそもくまモンが物語化しやすい題材であったということもできるのではないか。つまりくまモンには、物語を強く推進させるため（くまモンを成長させるため）の困難がマンガ化以前にすでにあり、物語メディアとしてのマンガと相性が良く、マンガになることによってくまモンの物語性が前景化したということができる。この困難の最たるものはもちろん熊本地震であるが、ここで注目すべきは、熊本地震の際にくまモンが感じた「ボクにはできることが無いモン」という挫折、および、ファンレターを読むうちに、自らが人々を

慰めたり喜ばせたりすることができると自信を回復するくまモンの姿（山本タマコの「心のケア」という言葉がこれを補強する）は、東日本大震災や熊本地震などの大災害を目の当たりにしたスポーツ選手、クリエイター、芸能人といった、広く「心のケア」に従事する人々の言説と酷似しているということである。「自らの仕事では物質的な支援はできず、いつもの仕事を通して人々の不安を少しでも和らげることが私の役目」という類の言葉は幾度となくマスメディアに掲載され、この考え方が人々に共有されているために、『学習まんがくまモン』におけるくまモンの成長が読者に容易く理解できるものとなっている。

### くまモンのインターネット記事

次に、くまモンの物語化に関するもうひとつの事例として、あるインターネット記事を検討したい。それは、『学習まんがくまモン』の刊行と同じ2018年、主婦と生活社が運営するウェブサイト「週刊女性PRIME」の連載記事「人間ドキュメン

ト」に掲載された、「くまモン、キャラ史上初「偉人」認定！ 彼のなかに「ハート」が宿るまでの奮闘記」（以下、「奮闘記」と略記）という記事である<sup>v</sup>。タイトルにある「偉人」認定」とは『学習まんがくまモン』のことを指しているが、このインターネット記事は、『学習まんがくまモン』とはやや異なるやり方でくまモンを物語化している。

2018年12月のこの「奮闘記」は、著者の亀山早苗氏が蒲島知事に、くまモンの2018年を振り返ってもらったところから始まる。蒲島知事によれば、この年は偉人伝の刊行に加え、くまモンの切手発売があり、また前年のくまモン関連グッズの売り上げが過去最高額にもなった。「奮闘記」の冒頭には、くまモンのご当地キャラクターとしての人氣が不動のものであることを印象づける言葉が並んでいる。その後、亀山氏の「今や日本のみならず世界的に人氣者になったくまモンだが、その道のりは決して順風満帆ではなかった」という言葉とともに、くまモンの誕生から2018年までの歩みが語られる。

その内容は、偉人伝『学習まんがくまモン』と重

なる部分がある一方で、この偉人伝にはない、くまモンの物質的な出自についての記述も見られる。たとえば「奮闘記」には、くまモン誕生の瞬間に関する水野学の次の言葉が記されている。「『くまもとサプライズ！』<sup>vi</sup> だからくまモンの目は基本的にびっくりしているんです。日本でヒットするキャラクターは、アンパンマンもピカチュウも、みんな頬が赤い。それも意識しました」。この発言からは水野氏によるビジュアルデザインの意図がよく理解でき、くまモンがクリエイターの計算によって誕生した創作物であることが明示されている。また、くまモンが着ぐるみキャラクターとして誕生したときのことについて、亀山氏はこう説明する。「当初は、熊の頭をかぶった、ただの細身の人型」「現在はゼロ号機とか初号機と呼ばれているこの「着ぐるみ」だが、とにかくかわいくなかった」。実際に「かわいくなかった」かどうかはさておくとして、本稿にとって重要なのは、くまモンのデザインが現在のものに固まるまで、くまモンの周囲の人々による試行錯誤があったことをこの発言が暗示しているという点である。

さらに、「奮闘記」の特徴として挙げられるのが、くまモンの芸能タレントとしての側面の強調である。まず、水野氏の次の発言が目を引く。「当時、宮崎県の東国原知事が毎日のようにテレビに出て宮崎県をPRしていたんですよ。ああいう人がいればいいなあ、何かいい方法はないかなと思って生んだのがくまモンなんです」。当初の目的からすでに、くまモンには人気タレントになつてもらいたいという制作者側の願いがあつたことがわかる。また亀山氏は、最初からくまモンのファンだというある姉妹の発言を引用する。「最初はイベントにも人がいなくてね。県の職員さんが、これをつけると、くまモンになれますよ」と赤くて丸いくまモンのほっぺを配ったり、くまモンのサイン会をやったり。私たちは人気が出ると信じて応援していました（笑）。これはまるで駆け出しのアイドルを応援する言説のようだ。さらに、くまモンが大阪で奮闘していた時代にくまモンのそばにいた、熊本県大阪事務所次長（当時）磯田淳氏の「テレビを見ながら、いつかせんとくんみたいになれたらいいね」とみんなで話したのを覚えて

います」という言葉も、くまモンに「下積み時代」があつたことを物語っている。

駆け出しのくまモンが困難に立ち向かう姿は『学習まんがくまモン』にも描かれていたが、「奮闘記」のほうは加えて、くまモンの制作側が試行錯誤したり、くまモンのファンが諦めずに応援したり、くまモンのマネージャーのような立場の人々がくまモンを支えたりと、くまモンをめぐる人々がくまモンの困難を共に分かち合っていた姿も記述されている。ただし、くまモンが人の手による創作物という出自がはっきり示されていたとしても、くまモンを「生きた存在」とみなすスタンスは「奮闘記」においても変わらない。「奮闘記」のなかで小山薫堂氏が「被災後のくまモンは頼りがいがあるなという印象。またひと回り大きくなった」というとき、その言葉と『学習まんがくまモン』の成長物語とは地続きである。つまり、「奮闘記」は、『学習まんがくまモン』とは異なるくまモンの困難（駆け出しアイドルの奮闘）を紹介してくれている一方で、困難を克服するくまモンの成長物語という図式は、両者に共通するもの

と言える。

### マンガ研究におけるキャラクター論

くまモンのこのような物語化は、キャラクターに関する研究を参照するならば、ある程度は説明できる。マンガ研究は、キャラクターに関する議論を展開してきた学問領域のひとつであり、本稿ではそのすべてを説明する余裕がないが<sup>vii</sup>、くまモンの物語化の事例を考えるうえでまず参考になるのは、小田切博『キャラクターとは何か』における議論である。というのもここで小田切は、キャラクターを考察する際に、マンガを検討しつつもマンガ以外のキャラクターをも射程に捉えた議論を展開しており、くまモンというキャラクターを考察する本稿の目的にあって良い足がかりとなる<sup>viii</sup>。

小田切は、自身のキャラクター理論を説明する際に具体例としてゲーム「マリオブラザーズ」のマリオの弟、ルイージを持ち出す。1983年に初登場したルイージは、当初は単に「マリオの色違い」「マリオの2Pカラー」であつたが、1986年の「ス

「バーマリオブラザーズ2」になるとゲーム操作の点でマリオとは異なるキャラクター（ルイージはマリオよりも高くジャンプできるが足が滑りやすく制御が難しい）になる。また、ゲーム機の性能が上がるにつれてビジュアルの細部描写が可能になり、「マリオより長身痩躯」「マリオと異なるひげの形」などの外見的特徴が形成されていく。さらに、吉田戦車による1994年のパロディマンガ『はまり道』ではルイージがひがみっぽいキャラクターで描かれるようになったりするし、また「マリオシリーズ」の個々のゲームにおいては、ルイージの役割や性格がマイナーチェンジを繰り返している。小田切はこの事例を通して、キャラクターの「図像」（絵としてのキャラクターデザイン）、「意味」（キャラクターの属性）、「内面」<sup>ix</sup>（物語を通して現れるキャラクターの心）は、固有名詞などを通してその同一性が担保されていれば、いずれも変化しうるし、キャラクターとは「融通無碍」に変化するものである、と考えている。

くまモンの物語化を考える本稿にとって、小田切による以下のふたつの指摘は示唆に富む。ひとつ目

はアメリカの擬人化キャラクター「アンクル・サム」についてのものである。アンクル・サムはもととアメリカの政治漫画において、アメリカを代弁するキャラクターという「意味」を持ったものである（星条旗柄のシルクハットをかぶった白人男性が視線と人差し指をこちらに向け「I WANT YOU」とアメリカ兵を募集するポスターが有名である）が、小田切によれば、アンクル・サムが主役のスーパーヒーローコミックスがあり、そのエピソードのなかで特定の性格が与えられている。つまり、もともと「図像」（星条旗柄のシルクハット、白人男性）と「意味」（アメリカ）しか持っていなかったキャラクターに、後から「内面」（スーパーヒーローの物語を通して現れる心）が与えられた、ということである。小田切のふたつ目の指摘はヴォーカロイド「初音ミク」の例である。これも、もともとキャラクターの「図像」と「意味」（ヴォーカロイドという設定）しかなかったところに、ファンによる二次創作（物語）によって「意味」や「内面」が付与されていたケースである。これらふたつの例（および『はまり道』の例）

が示すのは、はじめは非物語的な場所に存在するキャラクターに対して、プロのクリエイターによるものであれアマチュアによるものであれ、物語を付与する機会はそのかしこに転がっているということである。ならば、くまモンが物語化されたことについても、くまモンがキャラクターである限り、ある程度は必然の現象だということになる。

しかし一方で、くまモンの使用法は熊本県によってコントロールされており、けっしてファンの野放図な二次創作に開かれたものではない。熊本県が用意する「くまモン利用の手引き」<sup>x</sup>は、くまモンイラストの商用利用の希望者に向けたガイドラインであるが、この「利用の手引き」は、小田切が述べるキャラクター三要素「図像」「意味」「内面」のいずれの使用法についても言及している。たとえば「図像」については、基本的には「利用の手引き」に掲載されたくまモンのイラストを用いること（2023年8月現在で約300種類のくまモンのイラストがある）や、利用者がイラストを手描きする場合は「イラストどおりに忠実に表現」し、利用者の作風や個

性が表現されるような利用は原則NGであること、くまモンの頭部と胴体の比率の順守、くまモンの顔の見切れNG、印刷する際の色指定など、利用条件が細かく設定されている。また「意味」についても、熊本県公式のくまモンプロフィール「誕生日…3月12日（九州新幹線全線開業の日）」「性別…オスじゃなくて男の子」「年齢…ヒミツ（5歳というのは都市伝説）」「性格…やんちゃで好奇心いっぱい」「お仕事…いちおう公務員（熊本県営業部長兼しあわせ部長）」「特技…くまモン体操」が設定され、このプロフィールから想定されないような利用（たとえば飲酒や喫煙をするくまモン）や、プロフィールの追加・変更（たとえば甘いものが好きなくまモン）は不可となっている。口調（「モン」という語尾）や一人称「ボク」も変えることはできないし、熊本県PRという目的から外れた行動（たとえば他県のPR）をとることもできない。そして「内面」について言えば、「利用の手引き」には「ストーリーを伴う利用はしないでください」と書いてある。たとえば、くまモンイラストを用いて「くまモンが何かを食べに行く」物

語や、「他キャラクター等と戦う」物語を商用利用してはいけない。他のキャラクターとの親交があるような表現もNGである。では『学習まんがくまモン』はなぜ刊行できたのかということになるが、これについては「利用の手引き」に次のように書いてある。すなわち、「以下の場合、ケースに応じ表現を検討します。※くまモンが漫画、絵本等へ登場する場合（利用許諾可否と併せて検討）。※くまモンが、参考書等で説明役あるいは質問役となる場合（利用許諾可否と併せて検討）」。つまり、熊本県が認可した物語（およびそれによって与えられるくまモンの内面）なら可能である。

要するにくまモンは、潜在的には「融通無碍」なキャラクターではあるものの、「図像」にせよ「意味」にせよなるべく変化が生じないように熊本県によって管理されており、また原則として熊本県はくまモンに物語を与えず、したがって「内面」がなるべく生じないように気を配っている。そして物語化の機会がある場合には熊本県が監修に入り、公的な物語ないしくまモンの「内面」を設定するのである。

本来的に変わってしまう（ファンによって変えられてしまう）キャラクターというものを前に、キャラクターが変わらないよう注意しながら多くのファンを獲得しようとするこの熊本県の仕事は、原理的に困難なもののように思えるが、今のところ熊本県によるくまモン管理はうまくいっているようだ。熊本地震の際、そのシンプルな造形が幸いしてか、くまモンを応援する無数のイラスト（プロ・アマ問わず）が生まれた。なかには自身のマンガのスタイルが如実に表れたくまモン、すなわち「利用者の作風や個性が表現」されたイラストもあり、それらの「図像」が公共的に用いられたが、そのことでくまモンというキャラクターに変化が生じたということはおそろくないだろう。

ここに至りわたしたちは、くまモンが一体の着ぐるみであるという事実にあらためて目を向ける必要があるのかもしれない。小田切のキャラクター論は、たしかにマンガ以外のキャラクターをも考慮に入れた射程の広いものではあるが、ルイージやアンクル・サムや初音ミクとくまモンとの間には大きな違いが



存在する。それは、わたしたちは「本物」のくまモンに会うことができるということである。『学習まんがくまモン』や「奮闘記」で主題となっていたのは、動きまわる着ぐるみキャラクターとしてのくまモンである。マンガ研究者の岩下朋世も述べるように、

わたしたちはマンガを読むとき複数の「キャラクター」からひとつの「キャラクター」を構成する。つまり絵（画像）が先にあり、人格は事後的に形成されるのである。すでにできあがっているキャラクターの人格を表すために絵が描かれるのではない。新しく作られた「キャラクター」は、理念的には、その「キャラクター」を更新する権利をつねに持っているし、「この絵、この画像だけが真にこの人物そのもの」というような「キャラクター」はない。しかしながら、くまモンはそうではない。くまモンの複数の公式イラストからくまモンの「キャラクター」が立ち上がることはあるだろうが、その一方で多くの人々にとってくまモンのイラストは、「本物」のくまモン、つまり着ぐるみキャラクターのくまモンの、写しにすぎない。くまモンの公式イラストや関連グッズ、それにくま

モンを応援する人々の手によるくまモンのイラストは、「本物」のくまモンが健在である限り、その存在を根本的に変化させたり揺るがせたりする要因にはならないのではないだろうか。

### くまモンの動きと反復

ここまでの話をいったんまとめよう。『学習まんがくまモン』や「奮闘記」におけるくまモンの物語化は、小田切のキャラクター論を考慮するならば、キャラクターの「融通無碍」な本質を表した例のひとつである。しかし、小田切のキャラクター論が（たしかにマンガ以外のキャラクターを参照しているとはいえ）基本的に二次元のキャラクターを中心的な対象としているのに対し、くまモンは二次元のイラストとは別に着ぐるみキャラクターがおり、むしろ着ぐるみが「本物」でイラストはその写し、という関係にさえある。くまモンの二次創作には厳しい制限が課せられており、そもそも「画像」「意味」「内面」を変化させる機会に乏しいが、仮にそのような機会があったとしても、そのことが「本物」のくま



モンに大きな影響を与える可能性は低いのではない。以上がここまでの要約である。

しかしそれでも、小田切によるキャラクター三要素「画像」「意味」「内面」を着ぐるみのくまモンに適用することはある程度可能だろうと思われる。まず「内面」についてであるが、これはまさに本稿でこれまで紹介してきたくまモンの物語化のなかで現れているものだろう。また「画像」についてだが、小田切はこの概念をマンガ研究者・伊藤剛の「キャラ／キャラクター」論から引き継いでいる。伊藤によれば、「キャラ」とは「多くの場合、比較的に簡単な線画を基本とした画像で描かれ、固有名で名指されることによって（あるいは、それを期待させることによって）、「人格」のようなもの」としての存在感を感じさせるもの」であり、「キャラクター」とは「「キャラ」の存在感を基盤として、「人格」を持った「身体」の表象として読むことができ、テキストの背後にその「人生」や「生活」を想像させるもの」と定義される<sup>xi</sup>。伊藤の議論において「キャラ」は、絵そのものが持つ「存在感」のことを指しているが、

物語を抜きにした、その造形的なあり方そのものがすでに何かしら「生きているもの」のように感じられることはよく経験されることである。このことは、着ぐるみキャラクターにも言える。着ぐるみキャラクターはステージパフォーマンスなどで動きまわるが、その動きそのものは当然のことながら人間のようである。たとえば、『学習まんがくまモン』でも紹介されていたが、くまモンには「くまモンスクエア」という活動拠点があり、くまモンはほぼ毎日くまモンスクエアでパフォーマンスを行う（多いときには一日三回公演にもなる）。くまモンはステージ上で激しい動きをしたり、「くまモン体操」などの曲に合わせて踊ったりする。観衆とのコミュニケーションは「くまモン隊」というアテンドに媒介される。そうした動きを伴うやりとりは、厳密には伊藤のいう「キャラ」ではないかもしれないが、少なくとも人間らしい動きやパフォーマンス自体がくまモンの「人格」を感じさせるものとなっている。

ところで、くまモンの日々のパフォーマンス、つまりくまモンという「キャラ」の反復は、くまモン

にとつてどのような意味があるのだろうか。このことに関しては、精神科医の斎藤環『キャラクター精神分析』のなかの、ご当地キャラクター「せんとくん」の騒動についての分析が興味深い。斎藤によれば、平城遷都のキャラクターであるせんとくんは、その造形的な特徴により誕生当初「気持ち悪い」と悪評が立ったが、その悪評を含めて消費されるうちに（斎藤曰く「ネタとして弄りやすくしてから受容する」というルート）、いつしか「そういうキャラ」として受容され、人々がそれに慣れ、もはやせんとくんが「気持ち悪い」デザインなのかどうか冷静に判断できないところまでできている。ご当地キャラクターが置かれたこのようなメディア空間について、斎藤は次のように述べる。

「せんとくん」騒動からは、キャラが人々に受容されていくさいの重要な法則を学ぶことができる。まず、キャラには物語は必ずしも必要ではないが、受容のための文脈が必要であるということ。（中略）そしてもう一つ、キャラの受容文脈を作り出すの

は、ひたすら露出を繰り返しその同一性を認識してもらふことにつきる、ということである。 xii

つまり、せんとくんは毎日のようにメディアを通じてその悪評込みで喧伝されたが、その反復自体がせんとくんを生きながらえさせる秘訣だったのだ、というわけである。だとすれば、くまモンが毎日パフォーマンスを行い、メディアによって頻繁に報じられることは、くまモンが生きながらえるための必要条件であり、熊本県は理に適った戦略を行っているということになる。そしてその際、くまモンにとって物語は必ずしも必要なく、したがって「内面」は存在しなくともよいのである。

くまモンは、たしかに成長物語に伴う「内面」を備えているともいえるが、「内面」の有無にかかわらずその動きやパフォーマンス自体によって「キャラ」としての「人格」を人々に感じさせるものとなっている。というより、この「人格」が前提となつているためにくまモンはマンガのキャラクターとして存在でき、そのうえで成長物語が成立しているのでは

ないだろうか。くまモンの「人格」ないし「内面」が今後どのような展開を迎えるのか、引き続き注視していきたい。

- i 東日本放送特設サイト <https://www.khb-tv.co.jp/event/gotouchi-sp2023/index.html> より。(2023年11月27日閲覧)
- ii 群馬県特設サイト <https://gunma-characarnival.com/> より。(2023年11月27日閲覧)
- iii そもそも着ぐるみキャラクター自体は、この地キャラクターが爆発的に増加するよりも前から、日本人々にとって慣れ親しんだものであったと言える。というのもNHK番組「おかあさんといっしょ」の人形劇「プーふうー」以来、子供向けテレビ番組には数多くの愛すべき着ぐるみキャラクターが視聴者を楽しませ、また1990年代以降はプロ野球や「リーグ」などスポーツチームの Mascotキャラクターも観客をもたせてきた。人々が着ぐるみのこの地キャラクターに愛着をもつための素地がすでにある程度できていたところに、2004年のみうらじゅんによる「ゆるキャラ」命名があった。
- iv 日本この地キャラクター協会ウェブサイト <http://gotouchi-chara.jp/organization/> より。(2023年11月27日閲覧)
- v 週刊女性PRIME「人間ドキュメント」サイト <https://www.jpri.me.jp/articles-/14136> より。(2023年11月27日閲覧)
- vi 九州新幹線開業に伴い熊本に観光客呼び込もうと、熊本県と熊本家の小山薫堂が打ち出したキャッチコピー。この企画のなかでくまモンが誕生した。
- vii マンガ研究における近年のキャラクター論を手際よくまとめた文庫に、岩下朋世の以下の論考がある。岩下朋世「キャラクターを見る、キャラクターを読む」小山昌宏・玉川博章・小池隆太編著『マンガ研究13講』水声社、2016年、149～173頁。
- viii 小田切博「キャラクターとは何か」ちくま新書、2010年の、とりわけ第3章3節を参照。
- ix 「内面」という語の意味はマンガ研究の領域内でも幅があるが、

本稿では作家E・M・フォースターの「立体的人物」を念頭に置いている。つまり、物語のある状況に置かれた人物が示す言動で、読者にとってはしばしば想定外な、しかしその人物の心をリアルに捉えたもの、という意味合いで用いている。小田切もフォースターを参照している。

x 熊本県知事公室くまモングループによるウェブサイト「くまモンランド」内にある「利用の手引き」<https://kumamon-land.jp/mypage/lie/ryou-tebiki.pdf> を参照。

xi 伊藤剛「テック・イズ・ネッド」NTT出版、2005年、95～97頁。絵そのものの力を基盤とした「キャラ」は、小田切の図式では「図像」に、また「キャラ」を基盤とした、物語の登場人物の表象である「キャラクター」は、小田切の図式では「内面」に落とし込まれている。

xii 斎藤環「キャラクター精神分析—マンガ・文学・日本人」ちくま文庫、2014年、206～207頁。

# 日本文章学院『新文壇』記事一覽

山 本 歩

## 一、本稿について

新潮社（明治三十七年まで新声社）の創業期から発展期を支えた重要な事業に、文章専門の通信講義録や作法書の発行がある。通信教育事業は明治三一年、大日本文章学会の名で始動し、三五年に日本文章学院に改称、その後大正一二年まで継続した。その詳細や意義については宮崎睦之（「独習」と〈添削〉と——佐藤義亮の講義録——）（『日本近代文学』第六〇集、日本近代文学会、平成一一年五月）、同じく宮崎「講義する雑誌、講義する書物——新潮社・明治四十年代、投書雑誌の黄昏にて」（『立教大学日本文学』第八二巻、立教大学日本文学会、平成九年七月）、及び山本歩「日本文章学院とその小説作法」（『尚綱語文』第九号、尚綱大学文化言語学部・現代文化学部・日本文学懇話会、令和二年三月）を参照されたい。

同事業の中心は文章専門の講義録であったが、そ

の付録として月刊投書雑誌『新文壇』が生徒たちに配布された。明治四一年一月から大正五年三月まで刊行された同誌は、大正五年五月創刊『文章倶楽部』の前身となる。第一巻は菊倍版一二〜一六ページ、第二巻から菊版四四ページ、以降紙数は増加していき六〇を超える。生徒からの投書欄が大部分を占めるが、作家の寄稿や講師・編者陣の記事も、第一巻は三〜四ページ、第二巻以降は一六〜二五ページ前後、掲載されていた。これらを便宜的に「講話記事」と総称する。講話記事以外の投書欄は基本的には「佳作」欄とされる（二〇〇点満点の点数制）が、後半期には上位優等生以下を「抒情叙事文」「評論文」「書簡文」「論文」など細分化する形で評価していた。また、巻末には通信・交流コーナーとして「倶楽部」（読者倶楽部）と題された時期もある。欄が設けられた。

『新文壇』は公刊が確認されておらず、同時期の『新

『新潮』や、『文章世界』（博文館）などと比較して影響範囲は小さい。記事はいずれも長いものではなく重厚さに欠け、後期においては『新潮』からの再掲も多い。そのため同誌の存在感は薄く、従来、仔細に検討されて来なかった。だが講話記事の傾向から窺えることは多い。そこでは『新潮』や『文章世界』とは異なる形で〈文学〉が営まれている。新潮社の若者向け購買戦略、自然主義から距離を取りつつその成果を流用していく指導、著者のラインナップ——真山青果や小川未明はロールモデルとして君臨し、やがて『文章倶楽部』を担う加藤武雄、小林愛川も陰に日向に活躍する——たとえ再掲記事であっても、その時、そこで、その記事が読まれたことに意義があるはずだ。何より日本文章学院という機関の実態を探る上でその検討は欠かせない。

そこで本稿では、新潮社の通信教育機関「日本文章学院」の機関誌『新文壇』の記事を一覧化する。ただし紙幅の都合から、投書欄については記載を割愛し、講話記事のみを一覧化している。ページ数の記載も省略した。初出・再掲については今後精査して

いきたい。よって決して完全なリストではないが、向後の研究資料として発表するものである。

タイトルと著者（「」内）の表記について、第六巻までは目次が存在しないため各記事の標題に依った。表紙に目次が記載された第七巻以降は、当該目次に依った。著者の記載がない記事は無署名記事である。

## 二、『新文壇』講話記事一覧

### ■第一巻第一号（明治四十一年一月）

修辭的技能と高調の趣味「高楠順次郎」／世論概観（文学入門者に「島村抱月」／帰郷偶感「永井荷風」／芸術と技巧「小杉天外」）／文芸講話（材料の取扱ひ方「小栗風葉」／散文詩に就て「水野葉舟」／星光「徳田秋声」／自然の色「緑痕生」／漁村の念仏「田口掬汀」）

### ■第一巻第二号（明治四十二年二月）

文士と性情「大町桂月」／諸文士の『響』観／文芸講話（旅行記の書き方「山崎直方」／音楽「柳川春葉」）

■第一卷第三号（明治四二年一月）

写生文と小説―事件の興味を忘却する苦痛―「高浜虚子」／世論概観（印象主義の傾向（新潮）「蒲原有明」／文章と言語（文章世界）「小杉天外」／日記に就て（中学世界）「沼波瓊音」／文芸講話（印象派の文学「島村抱月」）／旅情「小栗風葉」

■第一卷第四号（明治四二年二月）

新文芸の一新体―葉舟氏の『響』を讀みて―「相馬御風」／世論概論（予が作品に対する希望（新潮）「夏目漱石」／文才のほひ（文章世界）「大町桂月」／和歌新辞典出づ／文芸講話（注意力―觀察力「幸田露伴」）／別れ際「真山青果」／小品一篇「金子薫園」／本院講師筆跡（其二）「大町桂月」「久保得二」「金子薫園」

■第一卷第五号（明治四二年四月）

文章の根本問題「山路愛山」／『父と子』を介す「一記者」／世論概観（女性描写に就きて（新潮）「小栗風葉」／自然主義の誤解（文章世界）／文章の著眼点（文章世界）／文芸講話（言文一致と修辭「島村抱月」）／泰西名作紹介（恋せし人の側に（ゲ

ーテー作）「内海月杖」／考の纏まる時「吉江孤雁」／本院講師の懇話会／渡守の親子「小栗風葉」／鴉の海「馬場孤蝶」／本院講師筆跡（其二）「小栗風葉」「生田弘司」「沼波武夫」

■第一卷第六号（明治四二年五月）

文章談義「夏目漱石」／文芸講話（言ふべき思想及び方法「佐々醒雪」）／世論概観（評論の權威（早稲田文学）「片上天弦」／短編の面白味（文章世界）「田山花袋」／充實した文章を書きたい（文章世界）「田山花袋」／旧型を脱せよ（新潮）「相馬御風」／泰西名作紹介（牧童（ハイネー作）「内海月杖」）／痛恨録「徳田秋声」／空を見るべき時「R・S・T」／ニイチェ曰く「生田長江」／火「小林愛雄」／文章の規箴／終篇金色夜叉原稿

■第一卷第七号（明治四二年六月）

作文の真味「三宅雪嶺」／夏を謳歌せよ／世論概観（自己の爲の芸術也（文章世界）「小杉天外」／文芸は感情の産物也（新潮）「泉鏡花」／泰西名作紹介（『接吻』梗概（チエーホッフ作）「馬場孤蝶」）／女（近著小品文集『夢』より）「真山青果」／湖

畔の美女「小栗風葉」／夏の感想「××××」

■ 第一卷第八号（明治四二年七月）

文章と品詞との関係「芳賀矢一」／旅行雑感「大町桂月」／漫語「相馬御風」／わが初恋の記「小山内薫」／旅の趣味「緑痕生」／旅硯「馬場胡蝶」／文士の筆蹟（島崎藤村「雜貨店」）

■ 第一卷第九号（明治四二年八月）

自分の文章を作れ「新渡戸稲造」／予が読書法「幸田露伴」／幼時の記憶「佐々醒雪」／物を観る稽古「島崎藤村」／小品二篇「水野葉舟」／余が自然の観方「三宅克己」／大阪講習会報告

■ 第一卷第十号（明治四二年九月）

文章と演説語「安部磯雄」／家庭と読書「佐々文学士」／予が書斎観「島崎藤村」／蝶を葬むるの辞「馬場孤蝶」／兄弟の祈り「徳田秋江」／鳥日記の一節「内海月杖」／顔の色「黒田清輝」

■ 第二卷第一号（明治四二年一〇月）

二種の文章「山路愛山」／趣味を広くせよ「上田敏」／秋懷二章「真山青果」／玄関番の見たる文士（一）小栗風葉氏／愛憎「小栗風葉」／移転問題「金子

薫園」／闇「葉舟」／『新書簡文』を介す「浩堂生」

■ 第二卷第二号（明治四二年一二月）

予が文章修行の経路「草野柴二」／雑誌へ投書すると云ふこと「生田長江」／玄関番の見たる文士（二）田山花袋／懇親会「森林太郎」

■ 第二卷第三号（明治四二年一二月）

文章上達の順序「小川未明」／真の文章術「徳富蘇峰」／文芸の趣味「徳田秋声」／玄関番の見たる文士（三）奥さん孝行の小杉天外氏／運命「小栗風葉」／明暗「金子薫園」／壁「水野葉舟」

■ 第二卷第四号（明治四三年一月）

予が文章上の経歴「沼波瓊音」／諸君への要求「太田水穂」／玄関番の見たる文士（四）万事低徊趣味の夏目漱石氏／農夫の娘「柳川春葉」／閑日月「阪本文泉子」

■ 第二卷第五号（明治四三年二月）

『日記新文範』と小林君「金子薫園」／作文実験談「佐藤紅緑」／今後の文章「三宅雪嶺」／『新書簡文』を読んで、金子講師及び本院に寄せられたる感謝状／玄関番の見たる文士（五）無愛想の正宗白鳥

氏／曉「小川未明」／文壇風聞記「蛸松」／交差点「三島霜月」

■第二卷第六号（明治四三年三月）

文章の調子と色「永井荷風」／俳句入門者に「内藤鳴雪」／玄関番の見たる文士（六）睡る暇もない小山内薫氏／講師消息（大町桂月、生田長江、佐藤浩堂、金子薫園）／文章問答／二才子「小栗風葉」

■第三卷第一号（明治四三年四月）

文章の新研究法「三宅雪嶺」／文章と競争心「大町桂月」／文学に顕れたる花「上田敏」／玄関番の見たる文士（七）骨董癖の柳川春葉氏／厩の馬「三島霜川」

■第三卷第二号（明治四三年五月）

ツルゲーネフの散文詩に就いて「志水生」／文章経験談「馬場孤蝶・生田長江」／論文の文体「金子筑水」／玄関番の見たる文士（八）胡蝶の様な水野葉舟子／相模の海「真山青果」

■第三卷第三号（明治四三年六月）

↓講話記事なし、投書欄のみ ※投書の増加のため

め、講話記事が省かれた

■第三卷第四号（明治四三年七月）

ツルゲーネフの散文詩に就いて「志水生」／『二家族』を読む「中村霞山」／本院の講習を了へたる諸君に告ぐ／改良を加へたる新潮見本 ※投書欄なし

▼以下、投書数の増加のため、第三卷第五号（明治四三年八月）から第四卷第三号（明治四三年二月）にかけて、講話記事なし、投書欄のみの誌面構成となる。第四卷第四号にて講話記事が復活。

■第四卷第四号（明治四四年一月）

動く絵と新しき夢幻「小川未明」／小説の中の会話「真山青果」／文章の進歩と退歩「幸田露伴」／北国の色「松原至文」

■第四卷第五号（明治四四年二月）

『新叙景文範』を介す「浩堂生」／文章と言語「藤岡勝二」／故郷の冬の印象「小川未明」／幻想「三



島霜川」／文芸問答

■第四卷第六号（明治四四年三月）

最良の修辭法「島村抱月」／長文と短文（附、懸賞短文選評余談）「金子薫園」／絵筆の思ひ出 火の河の跡「丸山晚霞」／幻覚「モオパッサン」／懸賞短文披露／文芸問答

■第五卷第一号（明治四四年四月）

端書きだより／※／青年の行くべき路「桑木嚴翼」／巻頭の『端書集』「浩堂生」／小説と脚本との取扱ひ方「坪内逍遙」／小説の題「徳田秋声」／「小栗風葉」／玄関番の見たる文士（六）魔性の生れ变りの泉鏡花氏／雀の巢「真山青果」／さとぶし「内海月杖」／懸賞文に就いて

※グラビアとして投書家たちの顔写真のグラビアが掲載

■第五卷第二号（明治四四年五月）

私の考へてゐる事「徳富蘆花」／文章と趣味品性「大町桂月」／文章上の経験「中島星湖」／夢に得た著作／我が国最初の新聞／諸家の恋物語（二）霧のやうな暖かな記憶「片上天弦」／夜航船「徳田

秋声」／文芸問答／批評の批評

■第五卷第三号（明治四四年六月）

紀行文について「小島鳥水」／理想的の旅「久保天随」／夏の俳句「沼波瓊音」／小説の題（二）幸田露伴・高浜虚子・塚原洪柿／諸家の恋物語（二）山の荒寺で見た女「窪田空穂」／盃中の味「小栗風葉」／下駄「上司小剣」

■第五卷第四号（明治四四年七月）

本院創立十周年記念／価値のない文章「矢野龍溪」／わが文章の過ぎ来しかた「大町桂月」／『五人女』を読む「薫園生」／銷夏の一策「藤代素人」／小説の題（三）「長谷川二葉亭」／自殺する女「秋田雨雀」

■第五卷第五号（明治四四年八月）

本院創立十周年記念／今後の論文「金子筑水」／『枕の草子』と清少納言「沼波瓊音」／清少納言と田山花袋「薫園」／執筆の実際（其一）「徳田秋声」／其二「遅塚麗水」／其三「柳川春葉」／其四「幸田露伴」／感興Ⅱ構想「小栗風葉」／小説の出来る時「菊池幽芳」／文士の好きなもの嫌ひなもの

／日没頃の空の色 忠実に叙景の筆を執らんとする人は科学者の説明に注意せざる可からず「石川成章」／文壇の隠れたる事実／海辺より（紀州小八幡にて）「真山青果」／高原「小川未明」／「貴族の家」を諸君に薦む「一記者」

■第五卷第六号（明治四四年九月）

人生を描くと云ふ事「島村抱月」／再び逢はざる悲み「小川未明」／予が文章の経路「島村抱月氏談」／小説の文章・モデルの取扱ひ方「徳田秋声」／事実と著想「泉鏡花」／感想二つ三つ「真山青果」／文士三世相「赤い卜星」／紀行文の面白味「大町桂月」／山と水との回想「遅塚麗水」／平面描写Ⅱ作家主観の反映「片上天弦氏談」／旧都の印象「松原至文」

■第六卷第一号（明治四四年一〇月）

小説を読む若き人に「長谷川天溪」／平家物語の叙事「内海月杖」／恥とは何ぞ——自己の活き方「真山青果」／書齋より「松原至文」／文壇聞き書／講話二種（円みのある作品「金子薫園」／作の上の自由）／最初の接吻「永井荷風」

■第六卷第二号（明治四四年一二月）

現代の文学に就て「馬場孤蝶」／秋と味覚「三島霜川」／私が文学に志した初め「永井荷風」／文壇五名家の初対面録（一）森鷗外先生／憶出の記「小栗風葉」

■第六卷第三号（明治四四年一二月）

脅かされざる生活「小川未明」／真の作家、批評家「金子筑水」／風の吹く日の興味「吉江孤雁」／文壇五名家の初対面録（二）坪内逍遙先生／文壇聞き／自殺「真山青果」／少年の日「岩野泡鳴」／愛儂「遅塚麗水」

■第六卷第四号（明治四五年一月）

平家の人々「高須梅溪」／余裕ある文章「高浜虚子」／予が日常生活（一）「徳田秋江」／（二）「小川未明」／歌集『山河』を薦む／山焼くる火「三島霜川」／投影「吉江孤雁」／墓場「福永挽歌」

■第六卷第五号（明治四五年二月）

文章を作り初めた頃「三島霜川」／新しい文学者の立場「馬場孤蝶」／感想録「高田の人」／藤村・花袋・秋声三氏の技巧（※）／『山河』を読む「小

林愛峰」／俠艶録を読む「浩堂生」／人から受けた印象（一）祖父母―バアナード・シヨ―「中村吉蔵」／歩きながら得る材料「泉鏡花氏談」／郷信「相馬御風」

※無署名だが岩野泡鳴の論を引用したもの

■第六卷第六号（明治四五年三月）

人生に対する興味「近松秋江」／私の欲してゐる批評家「永井荷風氏談」／自伝の一節「徳田秋声」／青年時代の独歩氏／明治文壇の恩人（二葉亭の人格と事業）「浩堂生」／人から受けた印象（二）私の頭から造り出した中江先生「小杉天外」／春の植物園「北原白秋」／春のおとづれ「相馬御風」／白鷗「白柳秀湖」

■第七卷第一号（明治四五年四月）

温帯から受ける思想の力「竹越三叉」／批評の真意義「徳田秋声」／私が影響を受けた愛読書「高安月郊」／自伝の一節「田山花袋」／私の青年時代「吉江孤雁」／拔萃帖から「泉鏡花」／前号佳作の批評「一講師」／林間の焼肉「若山牧水」／独りで思つてゐながら「水野葉舟」／午前一時「ボ

ドレール」

■第七卷第二号（明治四五年五月）

自己補足の文芸「片上天弦」／小川未明の文章「佐藤浩堂」／真実の声「徳田秋声」／幼い頃の記憶「泉鏡花」／風景の印象「中澤弘光」／前号佳作批評「一講師」／青い色「小川未明」／鶏（小品文）「三津木春影」

■第七卷第三号（明治四五年六月）

西鶴と三馬の文章「佐々醒雪」／『型』と『殻』「真山青果」／文壇に入れる径路「後藤宙外」／少年の笛を讀みて「昇曙夢」／小説のヒロイン／名文評釈「徳田秋声」／前号佳作批評「一講師」／最後の一節「佐藤浩堂」／渡船（日記より）「水野葉舟」／夜（小品文）「岡本靈華」／夏の歌

■第七卷第四号（明治四五年七月）

森の描写「水野葉舟」／添削しつゝ、「一講師」／十五年前の文壇「三島霜川」／小説の読み方「相馬御風」／夏の女「鈴木三重吉」／顔の印象「小栗風葉」／名文評釈「浩堂生」／歌の出来る時「金子薫園」／前号佳作の批評「一講師」／偽る者の

悲哀「真山青果」

■第七卷第五号（大正元年八月）

話と文との連鎖「坪内逍遙」／発見と創造「中村星湖」／歴史は活ける芸術也「潮虹生」／旅から受けた印象「蒲原有明」「吉江孤雁」／前号佳作批評「一講師」／母校に居た時代「島崎藤村」／小説を書く人の為に「三島霜川」／名文評釈「一講師」／山雀小籠「真山青果」

■第七卷第六号（大正元年九月）

文学者の行くべき道「後藤宙外」／会話を書く上の苦心「小栗風葉」／女心理描写「島崎藤村」／名文評釈「一講師」／高等学校時代「小山内薫」／秋「相馬御風」／前号佳作批評「一講師」／故郷のおもひで「片上天弦」／水国の初秋「水野葉舟」

■第八卷第一号（大正元年一〇月）

文学の与ふる利害「山路愛山」／空中飛行と官能の文学「栗原古城」／口語と莊嚴の文章「島村抱月」／前号佳作批評「一講師」／名文評釈「一講師」／新しい叙景文「吉江孤雁」／街はづれ「水野葉舟」／貧者の眼「蒲原有明」／日曜日の鐘声「三津木

春影」

■第八卷第二号（大正元年十一月）

有生命の文章「長谷川天溪」／単純と複雑「金子薫園」／新しい文体「蒲原有明」／南露の近代芸術家「馬場孤蝶」／前号の批評「一講師」／薄暮「高須梅溪」／東京の空「水野葉舟」

■第八卷第三号（大正元年十二月）

明治の翻訳家「春江」／唇の話「黒雲子」／考へて居る事「岩野泡鳴」／外界の印象と自己「中村星湖」／前号文叢の批評「一講師」／名文評釈「一講師」／読書の新味「馬場孤蝶」／冬の国「吉江孤雁」

■第八卷第四号（大正二年一月）

叙景の二方法と三段階「三島霜川」／クラシックに就て「永井荷風」／『死の勝利』研究会を起すの議「記者」／暖爐の前「諸講師」／『死の勝利』を薦むる所以「森田草平」／作家と天分「正宗白鳥」／質疑応答「一講師」／前号の批評「一講師」／バルタザール梗概「馬場孤蝶」

■第八卷第五号（大正二年二月）

新しき叙景「小川未明」／死の勝利研究会「生徒

諸子」／貧しき経験「水野葉舟」／新聞紙の経営「某氏談」／読書と記憶「島村抱月」／前号の批評「一講師」／質疑応答「一講師」／雛罌粟の花「三津木春影」／おもひ出「岡本霊華」

■第八卷第六号（大正二年三月）

警句に就いて「坂本文泉子」／藤村氏の渡欧「新文壇記者」／字引しらべ「×××生」／死の勝利研究会「生徒諸子」／西鶴の片鱗「真山青果」／明治の二文豪の死「道村春川」／広津柳浪」／ボドレエル小品「無名氏訳」／質疑応答「一講師」／前号の批評「一講師」／生徒諸君に望む「一講師」

■第九卷第一号（大正二年四月）

新描写法「真山青果」／復活祭の夜「松原至文」／破戒の文章「一講師」／質疑応答「一講師」／前号の批評「一講師」／文学講義録に就いて「一講師」／相国寺「浩堂生」

■第九卷第二号（大正二年五月）

新描写法「真山青果」／自然の調子を得よ「佐藤浩堂」／名文評釈「大町桂月」／前号の批評「一講師」／ワイルドの警句「一講師」／森鷗外氏の

一面「賀古鶴所」／新しき理想「小川未明」／文学講義の発刊「記者」／質疑応答「一講師」／憧れ心地「小栗風葉」

■第九卷第三号（大正二年六月）

文章と工夫「小林愛川」／青年諸君に「島崎藤村」／新しい文章「MB生」／新描写法「真山青果」／前号の批評「一講師」／名文評釈「徳田秋江訳」／戦塵「佐藤紅緑」／エンラン躑躅「小川未明」

■第九卷第四号（大正二年七月）

内容を養ふこと「小林愛川」／夏の自然の色と自然の力「蒲原有明」／夏の自然「小川未明」／感覚描写に就いて「佐藤浩堂」／前号の批評「一講師」／名文評釈「松原至文」／小説の題「徳田秋江」／旅なる夫へ「草野柴二訳」

■第九卷第五号（大正二年八月）

文章の調子「佐藤浩堂」／名文評釈「一講師」／十年後の文士「預言者」／新描写法「真山青果」／諸家の文章「沼波瓊音」／前号の批評「一講師」／『煙』に就いて「小林愛川」／恋の火「佐藤紅緑」／山国の馬車「小川未明」

■第九卷第六号（大正二年九月）

顔と服装「徳田秋声」／若き人々に「諸名家」／文章の種別「小林愛川」／女流作家初対面録「亀村生」／新描写法「真山青果」／『文学新語小辞典』「浩堂生」／前号の批評「一講師」／山焼くる火「三島霜川」／小品文に就て「一講師」

■第十卷第一号（大正二年一〇月）

秋に動さるゝ気分「相馬御風」／全力的事業「佐藤紅緑」／現時文壇の三大家「KS生」／初学者と写生「秋声」／葉舟」／新描写法「真山青果」／異字同訓解「一講師」／女流作家初対面録「亀村生」／秋の歌／名文評釈「大町桂月」／前号の批評「一講師」／秋いろ／「諸名家」／秋景雄興「草野柴二」

■第十卷第二号（大正二年一一月）  
懸賞文発表

■第十卷第三号（大正二年一二月）

本年第一の傑作「小林愛川」／描写の実際「真山青果」／日記は忠実に記せ「吉江孤雁」／「水野葉舟」／暮れ近し「金子薫園」／美人の印象「紀淑雄」／「日記の会」を開く「一講師」／異字同訓解「一講師」

／名文評釈「一講師」／訂正懸賞文発表／日本人と官能「某名家」

■第十卷第四号（大正三年一月）

現代作家評論（二）田村俊子「小林愛川」／描写の実際「真山青果」／世界的大傑作「サアニン」の研究を勧む「一講師」／異字同訓解「一講師」／「煙」の思ひ出「柴田流星」／名文評釈「一講師」／文章の工夫「泉鏡花」／霊の目ざめ「緑川春作」

■第十卷第五号（大正三年二月）

新しき叙景「小川未明」／描写の実際「真山青果」／生徒諸君に「一講師」／前号の批評「一講師」／「サアニン」評「四名家」／異字同訓解「一講師」／「血煙」を読む「小林愛川」／お夏清十郎「緑川春作」／途上にて「水野葉舟」

■第十卷第六号（大正三年三月）

人物を描く用意「正宗白鳥」／緑川春作氏に「小林愛川」／男の心をそる女性「徳田秋江」／地方色の研究「水野葉舟」／前号の批評「一講師」／名文評釈「一講師」／異字同訓解「一講師」／「復活」談「A—B—C」／小説 一夜「小栗風陽」

■第十一卷第一号（大正三年四月）

明治の四恩人「XYZ」／二人の女「鈴木鼓村」  
／地方色の研究「吉江孤雁」／郷土と作家「小川未明」／前号の批評「一講師」／異字同訓解「一講師」／晩春初夏の頃「水野葉舟」／露西亞の生活「瀨沼夏葉」

■第十一卷第二号（大正三年五月）

最近の感想「小川未明」／巴里の女「橋本邦助」  
／都会「真山青果」／名文評釈「一講師」／地方色の研究「森田草平」／感想文に就て「相馬御風」  
／前号の批評「一講師」／出版だより「一記者」  
／婚礼の曲「草野柴二」

■第十一卷第三号（大正三年六月）

心持はどう描くか「本間久雄」／『郷愁』梗概「佐藤浩堂」／ピエル・ロチに就て「後藤末雄」／夏の女「相馬御風」／大津より「徳田秋江」／前号の批評「一講師」／夢の研究「水野葉舟」／婚礼の曲「草野柴二」／マダム・ボワリーに就て「一記者」

■第十一卷第四号（大正三年七月）

本院高等科 文学部優等者の成績発表

■第十一卷第五号（大正三年八月）

未明と三重吉「片上伸」／地方色の研究「高安月郊」  
／八月の記憶「小川未明」「佐藤紅緑」／断頭台に上つた刹那の実感「米川正夫」／多作可乎、節作可乎「徳田秋声」／『新潮文庫』の発刊「一記者」  
／前号の批評「一講師」／婚礼の曲「草野柴二」  
／イギリス波止場「福永挽歌」

■第十一卷第六号（大正三年九月）

投書家論「無名氏」／感想文に就いて「相馬御風」  
／秋を迎ふる情緒「近松秋江」「三島霜川」／前号の批評「一講師」／「エルテル」の悲み「道村春川」  
／発売部の五分間「ABC」／余と大陸文学「馬場孤蝶」／余の投書家時代「田山花袋」／ロチの作風「一講師」／当方奇聞「生方敏郎」

■第十二卷第一号（大正三年一〇月）

人生の真の意味「徳田秋声」／海辺にて「真山青果」／秋の歌五首「諸家」／現代思想講話「一講師」  
／前号批評「一講師」／熱して書くと冷めて書く  
と「中村星湖」／俳句練習二題「沼波瓊音」／新

文範三則「道村春川」／新人情噺「近松秋江」／名家訪問記より「B生」／「クレオパトラの一夜」【A B C】

■第十二卷第二号（大正三年一月）

現代思想講話「一講師」／牡蠣（チエホフ）「松原至文」／競作・読書・暗誦「大町桂月」／慌だき生活の悲哀「徳田秋江」／最新文章の研究（小川未明の句）／作文日記に就て「一講師」／西鶴の五人女「×××」／私の崇拜した人々「吉江孤雁」／名作選集を介す「一記者」／『坊っちゃん』物語【A B C】／魔性「長田秀雄」

■第十二卷第三号（大正三年二月）

厭世文学「一講師」／小路「真山青果」／人物描写「中村星湖」／天才北村透谷「道村春川」／透谷の面影「北村美那子」／『春』の中の人物【A B C】／初日の出「一講師」／生活と色彩「小川未明」／バルザックの逸話「一講師」／いかなるを真の名文といふ乎「佐々醒星」／最新文章の研究「一講師」／肉のまどはし「生方敏郎訳」

■第十二卷第四号（大正四年一月）

現代思想講話「一講話」／高山樗牛「徳田秋江」／天才の片影（一葉に就て）／湖畔の少女「吉江孤雁」／文章雑誌「水野葉舟」／『わが袖の記』を読む「一記者」／最新文章の研究（島崎藤村の句）／年賀状のいろ／＼【A B C】／卒業試験に就いて「一講師」／ロメオとジュリエット「小林愛川」／一葉の『たけくらべ』「高山樗牛」／トルストイの『性欲論』「相馬御風」

■第十二卷第五号（大正四年二月）

創作雑誌「徳田秋声」／近代思想七回講話（第一回 近代思想とは何ぞや／第二回 文芸復興）／「一講師」／二葉亭の「平凡」／「一講師」／人妻と蕩児と（アナトール情話集より）／文章に於ける死んだ言葉「水野葉舟」／お里さんの記憶「岩野泡鳴」／最新文章の研究（泉鏡花の句）／ビョルンソンの山嶽小説「吉江孤雁」／二大家の動物描写「愛川生」／「フョーランドの娘」から「野尻抱影」

■第十二卷第六号（大正四年三月）

複雑と単純「一講師」／近代思想七回講話（第三回 希臘主義と希伯來主義）／「一講師」／芳醇無比



の文章「一記者」／『舞鶴心中』について「近松秋江」／背景のある歌「金子薫園」／最新文章の研究（永井荷風の句）／『罪と罰』の印象「内田魯庵」／『高野聖』の一節「泉鏡花」／文壇一百人「ABC」

■第十三卷第一号（大正四年四月）

文章雑誌「徳田秋江」／近代思想七回講義「一講師」／土蜂の唸る午後「真山青果」／黒い棺「緑川春作」／「舞妓姿」の作者より（幹彦）／「金子薫園集」を読む「中村伝二」／「今戸心中」の一節（柳浪）／「御風論集」を読む（愛川生）／小品文の作り方「水野葉舟」／椿咲く島「橋本邦助」

■第十三卷第二号（大正四年五月）

若き作家の為に「内田魯庵」／晩春「金子薫園」／近代思想十回講義「一講師」／トルストイの人物描写「本間久雄」／文章の気合「上司小剣」／最新文章の研究（鈴木三重吉）／夏の女「相馬御風」／『蒲団』と『縁』の女主人公「ABC」

■第十三卷第三号（大正四年六月）

多読乎多作乎「内田魯庵」／小夜ちどり「長田幹彦」

／神経の描写「本間久雄」／夏六題「一講師」／若い心のあと「TK」／夏の天地「田山花袋」／夏のいろ／＼「齋藤興里」／「八杉貞利」／作歌の経験「一講師」／銀座の夜「金子薫園」／国木田独歩と『運命』「相馬御風」

■第十三卷第四号（大正四年七月）

海潮の響「吉江孤雁」／父（ビョルンソン）「生田春月訳」／自然と人間「鐘田芳花」／須磨明石「沼波瓊音」／「小夜ちどり」を読む「秋山史朗」／「ハムレット」の一節「久米正雄」／明治の詩歌「一記者」／さまざまな青年の悲劇「KN生」／自然描写について「小川未明」

■第十三卷第五号（大正四年八月）

「お菊さん」「安倍能成」／「妻」に現はれたる二つの恋「水野葉舟」／祇園夜話／泡沫の輝き「沼波瓊音」／女三題（名文評釈）／思ひ出す事ども「鈴木三重吉」／作文の第一義「一講師」／家庭に於ける田山花袋氏／「たけくらべ」を読む「森ゆみじ」／日蓮上人と高山樗牛「山川智應」／況後録の一節（高山樗牛）

■第十三卷第六号（大正四年九月）

表情の描写「水野葉舟」／白昼の思ひ「田村俊子」  
／「三味線草」より「一記者」／思出の記「徳田秋声」  
／秋のうた（島崎藤村）／名文四章「一講師」  
／私の欲してゐる女「鈴木三重吉」／「恋ざめ」と「恋  
ごころ」「ABC」／両大家の技巧「徳田秋江」  
／漱石先生と秋声先生「王春嶺」

■第十四卷第一号（大正四年一〇月）

秋声のあらくれ「近松秋江」／海辺にて「真山青果」  
／秋の自然を描いた名文「ABC」／秋二題（百  
日紅「上司小剣」／白挽の唄「相馬御風」）／名文  
二章「一講師」／抒情文に就いて「水野葉舟」／「地  
獄に」序す「江馬修」

■第十四卷第二号（大正四年十一月）

出世作物語「ABC」／けふ此頃「薫園」／投書  
家の文章「徳田秋声」／恋の場面「一講師」／露  
西亜の文学と日本の文学「昇曙夢」／倫敦塔「金  
子薫園」／「文章日記」について「一記者」／詩  
人としての藤村「三木露風」

■第十四卷第三号（大正四年十二月）

小羊「中村白葉訳」／雪嶺氏の日常「XYZ」／

鎌倉より祇園へ「吉井勇」／祇園歌集を読む「一  
記者」／夢の話「未明、露風」／生活のスケッチ「黄  
金冠」／灰色の空「秋田雨雀」／新描写辞典に就  
いて「一講師」／露西亜文学者の生活状態「ABC」  
／畿内の街々「徳田秋江」

■第十四卷第四号（大正五年一月）

霊のなげき「道村春川」／或る女の裏面「小川未明」  
／「金子薫園集」の増版について／はつ恋の思出「T  
H生」／予が文章講義録を読みし思出／「はつ姿」  
の一節（小杉天外）／「小夜曲」を読む「小林愛川」  
／名文評釈「一講師」／貉（小泉八雲）「ABC訳」  
／雲のいろ／＼「KW生」／生活のスケッチ「黄  
金冠」

■第十四卷第五号（大正五年二月）

文章家となる道「沼波瓊音」／雲のいろ／＼「K  
W生」／女の一生―「奔流」の照子―「一記者」  
／「サフォ」の印象「一記者」／文話二則「大町  
桂月」／蛇遣ひ「吉江孤雁」／「お艶殺し」の一  
節「一記者」／明治初年の新聞雑誌「塚原洪祐」

／名金を介す「一記者」

■第十四卷第六号（大正五年三月）

福沢先生の文章「鎌田栄吉」／危険なる求婚（ビ  
ヨルンソン）／早熟の三詩人「B M 生」／早春の  
こと「浩堂生」／女三人（名文評釈）／料理屋の  
お神さん「徳田秋江」／伯爵と女記者（名金の一節）  
／箕輪心中の一節「一記者」／前号の批評「一記者」  
／文章訓六則「大町桂月」

【付記】『新文壇』の調査は株式会社新潮社資料室、

昭和女子大学図書館、日本近代文学館の所  
蔵物に依り、各施設のスタッフにご助力い  
ただいた。記して謝意に代えさせていただきます。  
きます。

・本研究はJSPS科研費（20K12940）の助成を受けた  
ものです。

# 夏目漱石『草枕』にみる

## 能楽世界の展開についての考察

飯 富 章 宏

### ① はじめに

平成25年（2013）より本学非常勤講師を勤めている能楽師の飯富と申します。今回は拙文を投稿させていただきます。専門の研究者でもなく大変おこがましいと存じますが、御披見いただければ幸いです。

熊本市黒髪に生まれ、若い時代を熊本にありました関係で、夏目漱石には大変興味を抱いております。作品『猫』にも苦沙弥先生の後架（便所）での謡の場面などで、漱石と能楽の関係は気になっておりました。その後ケンブリッジ大学の<sup>〔注1〕</sup> Britte Steger 先生からの依頼で、英国にて能楽の話をもていただく際に、この論考を起草しました。その後、本学の講義内にも使用しております。

皆様のご批評、ご指導を仰ぎたく、ご一読お願い

します。

### ① 夏目漱石と能楽

夏目漱石（1867-1916）は小説家、評論家、英文学者として日本では広く知られた人物である。彼はまた、ロンドン留学以前に熊本第五高等学校（現熊本大学）で教鞭を取り、熊本で活動したことも良く知られている。本稿は漱石の作品中、初期の『草枕』を中心に彼の芸術論中の能楽について考察する。

この作品はイギリス留学後、本格的な文筆活動に入る際の習作的作品と考えられる。漱石の芸術論がベースになっていると評価される。日亜の芸術として、俳句、漢詩、日本画、日本家屋、庭園、禅、能楽など。西洋の芸術として、英語詩文、シェイクスピア劇、オペラ、ターナーなどの絵画などと対比す

る形で比較文化論を展開する。

当時の世相として西洋至上的傾向があるのを批判し、日本の美を模索しようとする姿勢が現れている。特に、文中にあるように能楽的展開を使つて、この小説を構成しようとする試みが随所に見られる。

## ②『草枕』第一章について

以下本文抄出。出典は後述する。

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

以上有名な書き出し部分は、能の中で冒頭に現れる部分に擬せられる。画工の心情を独白の形で表現し、この作品の基底を表現している。

ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑（のどか）にし、人の心を豊かにするが故（ゆえ）に尊とい。

住みにくき世から、住みにくき煩（わずら）いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。

こまかに云えば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。

自己の芸術世界を紹介している。漱石は友人で親友の正岡子規を俳句の師とする。子規は写生・写実による現実密着型の生活詠を主張。この作品にもその影響を感じる。以下、自論の展開がしばらく続く

たちまちシェレーの雲雀（ひばり）の詩を思ひ出して、（中略）その二三句のなかにこんなものがある。

We look before and after

And pine for what is not:  
Our sincerest laughter  
With some pain is fraught;  
Our sweetest songs are  
those that tell of saddest thought.

(訳：前をみたり後ろをみたりして 我々はないものを  
探し求める 心から笑っているときも 我々は不安  
から逃れられない どんなにやさしい歌の中にも  
悲しい思いが潜んでいる)

なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀の  
ように思い切つて、一心不乱に、前後を忘却(ぼ  
うきやく)して、わが喜びを歌う訳には行かない。

以下東西の文学論を展開する。

したがってどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかるためには、わかるだけの余裕の  
ある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地

位に立てばこそ芝居は観て面白い。

小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、  
小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上  
げている。見たり読んだりする間だけは詩人で  
ある。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免か  
れぬ。苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣い  
たりする。見るものもいつかその中に同化して  
苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。  
取柄は利慾が交らぬと云う点に存するかも知  
れぬが、交らぬだけにその他の情緒(じょうちよ)  
は常よりは余計に活動するだろう。

それが嫌だ。苦しんだり、怒ったり、騒いだり、  
泣いたり人は人の世につきものだ。(中略)

ただ自分にはこう云う感興(かんきよう)が  
演芸会よりも舞踏会よりも葉になるように思わ  
れる。

ファウストよりも、ハムレットよりもありが  
たく考えられる。

こうやって、ただ一人絵の具箱と三脚几を担

いで春の山路をのそのそあるくのも全くこれがためである。

(中略) 以下、ダ・ヴィンチの言葉から能楽論を展開する。

ただ、物は見様でどうでもなる。

レオナルド・ダ・ヴィンチが弟子に告げた言葉に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。

一人の男、一人の女も見様次第でいかようと見立てがつく。

どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、そのつもりで人間を見たら、浮世小路(うきよこうじ)の何軒目に狭苦しく暮した時とは違うだろう。

よし全く人情を離れる事が出来んでも、せめて御能拝見の時くらいは淡い心持ちにはなれそうなものだ。

能にも人情はある。(注<sup>2</sup>) 七騎落でも、(注<sup>3</sup>) 墨<sup>マ</sup>田川でも泣かぬとは保証が出来ん。しかしあれ

は情三分芸七分で見せるわざだ。

我らが能から享(う)けるありがた味は下界の人情をよくそのままに写す手際から出てくるのではない。

そのまの上へ芸という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長(ゆうちょう)な振舞(ふるまい)をするからである。

しばらくこの旅中に起る出来事と、旅中に逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう。

Shakespeare の作品名や Shelley の『To a Skylark』の詩文や、Leonardo da Vinci の言葉などから西洋の芸術論や、また、漢詩や芝居、小説(明治初期の)などを挙げるが、最終的に能楽の手法を使ってこの物語を語ろうと宣言している。

### ③ 二章についての考察

二章は有名な「峠の茶屋」の記事である。長いので途中から引用する。

返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待つてるのも少し二十世紀とは受け取れない。ここらが非人情で面白い。

以上、能楽での前段の主人公（前シテ）の登場部分に擬している。主人公も誰もいないところに、何者かの登場を待つのは、能楽の常套手段である。

その上出て来た婆さんの顔が気に入った。

二、三年前<sup>注4</sup> 宝生の舞台で高砂を見た事がある。

その時これはうつくしい活人画だと思った。

箒（ほうき）を担（かつ）いだ爺（じい）さんが橋懸りを五六歩来て、そろりと後向になつて、婆（ばあ）さんと向い合う。その向い合うた姿勢が今でも眼につく。

余の席からは婆さんの顔がほとんど真むきに見えたから、ああうつくしいと思った時に、その表情はぴしやりと心のカメラへ焼き付いてし

まった。

茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている。

以上、まさに能楽の構成を持つて表現しているのが理解できるであろう。

宝生の別会能を観るに及んで、なるほど老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚ろいた。あの面は定めて名人の刻んだものだろう。

余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向うを指（ゆび）さしている、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考えた。

余が写生帖を取り上げて、今しばらくという途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

この辺りは能の前場の、地謡が叙景的な謡を合唱し、曲全体の調子を整えていく箇所比すことができる。読者を次第にこの物語の世界に引き込んでい



く部分だ。

漱石が宝生新に正式に師事するのは、ずっと後のことである。ここでの能楽の知識には誤謬がある。まず、高砂の能では各流儀とも、ツレの姥（うば）が先に登場し、シテの尉（じょう）があとから登場すると姥は後ろに向き、互いに向かい合って一声（いっせい）の謡をうたう。また、持ち物も姥が杉箒（すぎばうき）、尉が杷（さらえ…熊手のこと）である。

漱石は実際に観能したのかもしれない（明治37年～38年の宝生月並能に『高砂』の演目がある）が、この描写は間違えている。『高砂』のツレの面をほめているが、そう名物面を使用しているとは思えない。そうこうする内に、馬子（まご…馬ひき）がきて、那古井（なこい…温泉場。漱石は熊本市郊外小天（おあま）にある知人の別荘に宿したことがある）の嬢様の話になる。

御婆さんが云う。

「源さん、わたしや、お嫁入りのときの姿が、まだ眼前に散らついている。裾模様の振袖に、高

島田で、馬に乗って……」

「そうさ、船ではなかった。馬であった。やはりここで休んで行つたな、御叔母さん」

「あい、その桜の下で嬢様の馬がとまったとき、桜の花がほろほろと落ちて、せつかくの島田に斑が出来ました」

余はまた写生帖をあける。

この景色は画にもなる、詩にもなる。

心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見てしたり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書きつける。

不思議な事には衣装も髪も馬も桜もはっきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思いつけなかった。

（中略）、画工是那古井の温泉場に投宿し、その御嬢さんである那美さんと会う。普通と違う挙動の彼

女に興味を持ち画工的に観察する。画になる場面を期待するが、そのチャンスに今一步届かない。

#### ④ 最終章前半についての考察

先生は画工。老人は奈美さんの父。久一さんはこれから満州に出兵する甥。それと奈美さんの兄がいる。久一を見送るために<sup>(注5)</sup> 停車場まで船に乗っている。

「先生、わたくしの画をかいて下さいな」と那美さんが注文する。

久一さんは兄さんと、しきりに軍隊の話をしている。老人はいつか居眠りをはじめた。

「書いてあげましょう」と写生帖を取り出して、

春風にそら解け繻子の銘は何

と書いて見せる。女は笑いながら、

「こんな一筆がきでは、いけません。もっと私の気象の出るように、丁寧にかいて下さい」

「わたしもかきたいのだが。どうも、あなたの顔はそれだけじゃ画にならない」

「御挨拶です事。それじゃ、どうすれば画になるんです」

「なに今でも画に出来ますがね。ただ少し足りないところがある。それが出ないところをかくと、惜しいですよ」

「足りないたって、持って生れた顔だから仕方ありませんわ」

「持って生まれた顔はいろいろになるものです」

「自分の勝手にですか」

「ええ」

「女だと思って、人をたんと馬鹿になさい」

「あなたが女だから、そんな馬鹿を云うのですよ」

「それじゃ、あなたの顔をいろいろにして見せてちょうだい」

「これほど毎日いろいろになってればたくさんだ」

女は黙ってむこうを向く。

画のモデルとして那美さんを観察する画工はその瞬間を求めているが、今一瞬が成立しない。何かが足りない。この会話はそれを暗示している。書評ではよく、画工が那美さんに恋心を抱くかのように評されるが、そうであろうか？どちらかというと、一挙手一動作を観察し、ある時は驚かされ、ある時は感心させられて、どうにか画になる瞬間を探しているように思える。

また、画工が一点も画を完成させないのは、本来、画を描かせようとは思っていないからである。一人の芸術家として対象を観察する行為自体が重要で、言葉を換えれば、作家はどのような姿勢で対象を観察していかなければならないと、その姿勢を説いている。ここでは芸術の対象は画であるが、本来は芸術全般共通の芸機、禅の世界における悟道の瞬間である禅機を追い求めているのだ。

画工は結局最後まで画を描かない。漱石は芸術家の代表として画工を登場させているのであって、文筆も本来は芸術の一つだといいたいのである。その題材として美しき物を追い求めている。

## ⑤ 最終部分についての考察

この場面のあと、沿岸の風景描写や停車場の様子が記述されて、いよいよ久一が汽車に乗り込む場面となる。

クライマックスに野武士と呼ばれる人物が登場するが、これは那美の分かれた亭主である。食い詰めて再起を図ろうと満州に旅立つ。この数日前に那美は野武士風の男に呼び出され、頼まれたお金を手渡すのを、画工は目撃する。この時の模様も、もう少しで画にできていない。

このあとは急展開で終局に向かう。能のいわゆる序破急の理論により、終曲部は急の位に終えるようにしている。では終局部をみてみよう。

「死んで御出で」と那美さんが再び云う。

「荷物は来たかい」と兄さんが聞く。

蛇（列車のこと）は吾々（われわれ）の前でとまる。横腹（よこはら）の戸がいくつもあく。

人が出たり、這入ったりする。

久一さんは乗った。老人も兄さんも、那美さ

んも、余もそこに立っている。

車輪が一つ廻れば久一さんはすでに吾らが世の人ではない。遠い、遠い世界へ行ってしまう。

その世界では煙硝（えんしょう）の臭いの中で、人が働いている。そうして赤いものに滑（すべ）って、むやみに転ぶ。空では大きな音がどんどんと云う。

・・・（ここでの記述は戦場のことである。友人であり俳句の師でもある正岡子規は従軍記者として満州に行っている）

これからそう云う所へ行く久一さんは車のなかに立って無言のまま、吾々（われわれ）を眺めている。

吾々を山の中から引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果（いんが）はここで切れる。もうすでに切れかかっている。

車の戸と窓があいているだけで、御互（おたがい）の顔が見えるだけで、行く人と留まる人

の間が六尺ばかり隔っているだけで、因果はもう切れかかっている。

車掌が、ぴしゃりぴしゃりと戸を閉てながら、こちらへ走って来る。一つ閉てるごとに、行く人と、送る人の距離はますます遠くなる。

やがて久一さんの車室の戸もぴしゃりとした。

世界はもう二つになった。

老人は思わず窓側へ寄る。

青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云う声の下から、未練のない鉄車の音がごつとりごつとりと調子を取って動き出す。

窓は一つ一つ、われわれの前を通る。

久一さんの顔が小さくなって、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髯（しわ）だらけな野武士（のぶし）その男の見た目の表現（げん）が名残りおしげに首を出した。

そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合せた。

鉄車はごとりとごとりと運転する。

野武士の顔はすぐ消えた。

那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。

その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐れ（あわれ）」が一面に浮いている。

「それだ！それだ！それが出れば画になりますよ」と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った。

余が胸中の画面はこの咄嗟の際に成就したのである。（了）

以上、草枕の冒頭部分と、終局に絞って考察した。

## ⑥ 結語

なぜ「憐れ」が出ると画になるのか。それは、能楽のクライマックスがそうだからである。『隅田川』の母がわが子の幽霊を抱きとめようとして果たさぬ

瞬間。『井筒』の女が井戸の中をのぞきこむ瞬間。など、能は画となる瞬間を提供する楽劇である。能の手法を使ってこの小説を書くと言言しているのだから、クライマックスはお約束の通り能で終わる。

全文を考察すると、漱石の芸術観はあらゆるところに現れている。英国留学中に少しノイローゼ気味であったようだが、その時に勉強した、当時の英文学の形態を日本に紹介したかったのであろうか。また、江戸戯作や俳文の形式を脱しない当時の文壇にも一石を投じたかったのであろうか。

対象とする人間や自然については、あくまで日本の美を求めていくのも漱石文学の特徴ともいえ、その後の漱石山脈と呼ばれる純文学の主流にもその影響は受け継がれている。のちの、芥川龍之介や谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫などの文豪もその延長にあり、また能楽に興味を持ち、おのおのの作品にもその影を映しているのは明らかである。

戦前戦後の日本映画にも能楽の影響は大きい。黒

澤明の撮影手法などは能舞台の影響を深く感じる。  
『影武者』の中で、琵琶湖畔の瀬田の橋を遠望する  
峠で信玄が落命し、帰郷のあと戦勝の祝いの能では  
『田村』が演じられる。「瀬田の唐橋ふみ渡り」の謡に、  
志村喬演じる老臣が涙する場面。また、『乱』で荒野  
の中で盲目の王子がさまざまの場面はまさに『弱法師』  
の一面面を借りている。黒澤の影響を大きく受けた  
スピルバーグやルーカスの作品にもその影響は流れ  
ている。

漱石作の『草枕』は、能楽の影響を深く受けてい  
るという趣旨で論述した。異見も多々あるであろう  
が、近現代文学を研究する際に、能楽をはじめとす  
る古典芸能の影響を考慮する必要があることは異論  
を待たないであろう。(了 文責・飯富章宏)

※本稿の「草枕」引用はインターネットの図書館青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で、あとがきの記載は以下になっている。『底本：「夏目漱石全集3」ちくま文庫、筑摩書房1987（昭和62）年12月1日第1刷発行、『底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房1971（昭和46）年4月・1972（昭和47）年1月「初出：「新小説」1906（明治39）年9月／データ入力：柴田卓治／校正：伊藤時也／1999年2月17日公開／2011年5月21日修正

(注1) Brigitte Steger 1965年オーストリア生。ウィーン大学日

本学研究所博士（日本学）。ケンブリッジ大学東アジア研究  
所准教授。日本の社会人類学、とくに日常生活。著書『世界  
がミトメタ ニッポンのイネムリ』Inemuri: Wie die Japaner  
schlafen und was wir von ihnen lernen können (Hamburg:  
Rowohlt, 2008) [https://www.ames.cam.ac.uk/people/dr-](https://www.ames.cam.ac.uk/people/dr-brigitte-steger)  
[brigitte-steger](https://www.ames.cam.ac.uk/people/dr-brigitte-steger) #

(注2) 七騎落 頼朝が初戦で敗れ主従で逃れる時、土肥親子などの  
精愛を描く能の作品。

(注3) 墨田川 能『隅田川』観世元雅（世阿弥の子）の作品。東国  
まで我が子を探しついに悲劇となる名曲。

(注4) 宝生の舞台 現在の宝生舞台は文京区本郷一丁目にある。  
1913（大正22年）竣工。それ以前は宝生流宗家宅の能舞  
台、または旧芝能楽堂舞台（現靖国神社能舞台）で行われた。  
漱石は留学後『猫』を新聞に投稿し、その脱稿後1906（明  
治39年）に『草枕』を書いた。熊本や留学後の東京での取材  
メモから作成したのである。

(注5) 停車場 現在の上熊本駅、1891年（明治24年）九州鉄道の  
池田駅として開業。1896年（明治29年）4月13日に旧制  
第五高等学校に赴任した夏目漱石が降り立った場所としても  
知られる。当時は駅の西側に船着き場が隣接していた。

## 令和五年度 卒業論文題目一覧

日韓アニメ作品に反映された文化の特徴について

―「クレヨンしんちゃん」と「碧子」を中心として―

赤峰 莉音

漫画『ゴールデンカムイ』の物語論的分析

有村 彩花

マンガ『とんがり帽子のアトリエ』の絵画的構成について

池邊 奈央

スポーツアニメにおける言語的ジェンダー表現の使用に関する研究

枝川 珠李

「千と千尋の神隠し」から見る観光業

大村 実由

「文豪ストレイドッグス」のアダプテーション

―アニメ化について―

緒方 響

日韓ドラマにおける女性の仕事・恋愛・結婚観の比較

小川 聖

ゲームコンテンツとポリティカル・コレクトネス

奥村 董

『ヘレディタリー／継承』における女性表象

鹿子木千夏

マンガにおける悪役令嬢ジャンルの物語構造

河北 咲希

ヒロインの「家庭」における役割の変化

―『226』連続テレビ小説を素材として―

川口 ひな

日本の伝統文化における「湯道」の波及効果

―「松屋水禅」に湯道を取り入れたことによる経済効果について―

清田 紗帆

ヤングアダルト世代を対象とした図書館サービスの現状と課題

久保田 光

「るるぶ」で取り扱ったポップカルチャーの研究について

倉橋 歩果

阿蘇地方の伝説の一考察 ―南阿蘇村を中心に―

小堀 好華

小川未明論 ―暗い「色彩」の作品と未明の人生観―

酒井 采乃

名和一族の一考察

佐藤 彩夏

異能力バトルジャンルにおける

『文豪ストレイドッグス』の特徴

佐藤 朱夏

相良氏の一考察

高宮 皐

二次元アイドルのファン行動

―『あんさんぶるスターズ！／!!』ファンダムを中心に―

田島 遥

漫画『化物語』における女性の身体表現の役割

椿 結圭

綿矢りさ作品における「語り」の特徴

田中 美空

擬人化・獣化作品における社会の多様性の分析

富田 紗由

江戸川乱歩作品における海外文学の影響

中村 明衣

女性アイドルの日韓比較 ―女性ファンダムの視点から―

成松 優奈

日韓両国の制服文化についての比較研究

西 彩花

現代ミステリー小説に見る母性

橋柿 茜

作中虚構の世界、その可能性 ―村上春樹の短編を通して―

濱田 季子

大学生のキャッシュレス決済利用に関する現状と課題

濱田 雅衣

女は語る ―「女生徒」と「皮膚と心」の比較から―

藤井 美佑

有川ひろの人間観について

～作中キャラクターの分析を通して～

船本 光彩

二次元男性アイドルと三次元男性アイドルの比較研究

本田 文香

クトゥルフ神話TRPGのプレイ動画における

コミュニケーションについて

松下菜々美

大学生の「バイト敬語」に対する受容と違和感

宮川 響

ファストファッションから見るウイグル問題と日本

宮本 愛香

日韓の大学生のキャンパスライフについての研究 宮本野乃子

女子大学生に対する飲むヨーグルトの効果的な  
訴求方法について

矢野 遥

谷崎潤一郎作品における女性像

吉田 和奏

インバウンド再生

六ヶ所 蒼

～温泉への誘客を日本とドイツから考える～

合澤 真優

～人気テーマパークと比較～

漫画『ハイキュー!!』のリアリズム

福田 彩乃



## イベント「尚綱大学で学ぶ『キャラとストーリー』」

### 二〇二三 実施報告

八月二六日（土）、九品寺キャンパス大学7号館にて、イベント「尚綱大学で学ぶ『キャラとストーリー』2023」を実施しました。

現代文化学部では、「キャラ」や「ストーリー」が欠かせないメディアであるマンガやアニメ、小説などを学ぶことができます。「尚綱大学で学ぶ『キャラとストーリー』」は、「キャラ」や「ストーリー」に関する学びを高校生に親しんでもらおうと、昨年からは始まったイベントです。今回は二回目の開催で、高校生九名が参加してくれました。

午前中は、「キャラ」や「ストーリー」を理論的に考える講義を行いました。すこし難しい内容だったかもしれませんが、高校生たちはみな熱心に耳を傾けていました。

午後からは、高校生たちが実際に「キャラ」「ストーリー」の作成に入りました。与えられた時間は二時間半と決して長くはないなか、高校生たちは自分たちのアイデアをなんとか形にしようと必死に頑張っていました。

厳正なる審査の結果、以下のみなさんに各賞が授与されました。

### 最優秀賞…

伊方文音さん（県立第一高校一年）

### 優秀賞…

岡田琉那さん（熊本中央高校三年）・

新福美咲さん（県立熊本工業高校三年）ペア

### 合志マンガミュージアム特別賞…

西島薫さん（県立第一高校一年）

真剣ながらも和気あいあいとした雰囲気のとて、楽しいイベントとなりました。このようなイベントを今後も定期的に開催し、高校生に充実した時間を提供できればと考えています。

（文責 三浦 山本）

## 「尚綱ビブリオバトル二〇二三」を開催しました

尚綱大学現代文化学部では、熊本県内女子高校生を対象とした催しとして、令和五年七月二十九日（土）に九品寺キャンパスで「尚綱ビブリオバトル二〇二三」を開催しました。

「ビブリオバトル」は、発表者がお気に入りの本を五分間で紹介し、観衆の投票により「一番読みたい本」（チャンプ本）を決めるゲーム性のある書評大会です。文芸文化領域を設けており、司書資格取得が可能な尚綱大学現代文化学部では、「本」に関するイベントとして、この「ビブリオバトル」を平成三十年度的から開催してきました。新型コロナウイルス感染拡大の影響に伴い中断した期間もありましたが、今年度は四回目の開催となりました。

今回は、熊本県内の女子高校生十人が「バトラー」（発表者）として参加し、さまざまな本の紹介を行いました。会場の観衆からは、「本の中の好きなセリフは」「その本を読もうと思ったきっかけは」など、活発な質問も出されました。

投票の結果、「チャンプ本」には熊本マリスト学

園高等学校の木山さくらさんが紹介した『もものかんづめ』が、また「準チャンプ本」には熊本県立鹿本高等学校の古川夏海さんが紹介した『夢をかなえるゾウ』が選ばれました。そのほかの発表者からも、本に対する思いがこもった発表を聴くことができました。

（記 桑原 芳哉）



今回のチャンプ本と準チャンプ本

執筆者紹介（掲載順）

|       |           |
|-------|-----------|
| 武田 昌憲 | 本学教授      |
| 畠山 真一 | 本学教授      |
| 福永 美佳 | 本学准教授     |
| 三浦 知志 | 本学准教授     |
| 山本 歩  | 本学講師（専任）  |
| 飯富 章宏 | 本学講師（非常勤） |

尚 綱 語 文 第十三号

令和六年三月十二日 印刷

令和六年三月十八日 発行

編集・発行者 尚綱大学・現代文化学部・

日本文学懇話会

〒862-8678

熊本市中央区九品寺二一六―七八

電話 ○九六（二〇三）六三〇〇（代）

株式会社 協和印刷

熊本市東区保田窪本町一五―五〇

電話 ○九六（二七三）九五一一

印刷

題字 林田俊一郎

